

42216

教科書文庫

4
810
42-1925
20000 40088

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

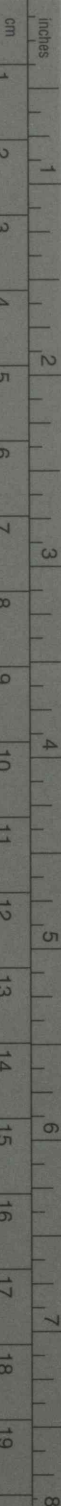


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
MaZO
資料室

國文
新撰
近世名著抄
松井簡治編
全



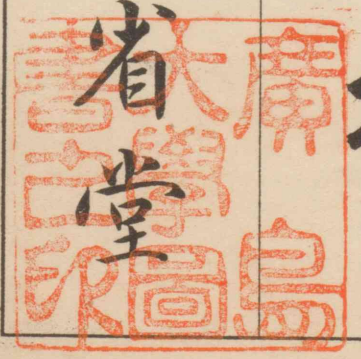
375.9
Ma20

資料室

文學博士 松井簡治編

國文 新撰 近世名著抄

東京 株式會社 三省堂



國文 新撰 近世名著抄 目次

花月草紙

- 一 序 一
- 二 月のさしのぼる頃 二
- 三 代々の亂れ治るきは 三
- 四 えみしの人 四
- 五 はや鍋はや鍋 五
- 六 月の夜半 六
- 七 理の如くせば又病をも得べし 七
- 八 那須與市 八
- 九 昔の鎧と今の鎧 九
- 一〇 花の咲く頃 一〇
- 一一 痕おしなでて響む 一一

目次

と か か と と ね たり

手紙
一冊

一二 四つの時のうつりゆく景色……………二七

一三 かゝる時黄金持ちて何にかはせん……………二七

一四 物をつくして言ふべきには非ず……………二八

一五 二人の使者……………二九

一六 心にて見給へかし……………三〇

一七 ある醫師……………三一

一八 月なき夜半……………三二

一九 日新の教……………三三

二〇 鷹の子……………三四

二一 利害得失……………三五

二二 今參のをうな……………三六

二三 生々の徳……………三七

二四 辟すれば正しきを失ふ……………三八

二五 若々とあらまほし……………三九

二六 天命……………四〇

二七 鷹の羽に棲む蟲……………四一

二 泊酒文藻

二八 築紬を引きてなだむ……………三三

二九 隅田川原の花見……………三三

三 琴後集

一 琴後集序……………三七

二 萩をめづる詞……………四〇

三 擣衣を聞く……………四三

四 漁父辭……………四三

五 植村正路を哭す……………四三

六 筆の跡を見てなき人をしのぶ……………四四

七 縣居翁の墓參會に……………四四

一 泊酒舎の記……………五一

二 知足庵の記……………五一

三 隨時樓の記……………五二

四 くもる秋の月を見る記……………五

五 雪をめづる記……………五

六 上田秋成がもとへ……………六

七 月花のあはれをことわる詞……………六

四 雨月物語

一 夢應の鯉魚……………六

二 菊花の約……………七

五 玉かつま

一 縣居のうしは古學のおやなる事……………六

二 古書どものこと……………七

三 學問……………八

四 あらたなる説を出す事……………九

五 からうたのよみさま……………九

六 大神宮の茅葺なる説……………九

七 頼朝卿靜をめして舞はせられし事……………五

八 ふみよむことのたとへ……………五

九 あらたにいひ出でたる説……………五

一〇 おのが物まなびの有りしやう……………七

一一 縣居のうしの御さとし言……………九

一二 おのれ縣居のうしの教をうけしやう……………九

一三 師の説になづまざる事……………一〇

一四 わがをしへ子に戒めおくやう……………一〇

一五 富貴を願はざるをよき事にする論……………一〇

一六 ひとむきにかたよることの論……………一〇

一七 前後と説のかはる事……………一一

一八 あやしき事の説……………一二

一九 花のさだめ……………一四

二〇 あだし國あることを知らざりし事……………一七

二一 道のひめごと……………一九

二二 歌を思ふほどにあること……………二〇

二三 しづかなる山林を住みよしといふ事……………二三

二四 おのが京のやどりの事……………二三

六 駿臺雑話

一 老僧が接木……………二四

二 武運の稽古……………二六

三 善悪の報……………三一

四 直諫は一番槍より難し……………三四

五 杉田壹岐……………三六

六 燈臺もと暗し……………四一

七 月は世々の形見……………四五

目次終



新國文 近世名著抄

花月草紙
磐城白河の城主
松平定信の隨
筆。定信は樂翁
と號し學問を好
み、大に文教を
振ひ起した。
文政十二年、七
十二歳で歿し
た。

一 花月草紙

一 序

久しう浦わの里に住める翁ありけり。めかり鹽焼く暇には、えう
なき藻屑かい集めて、しほやの窓の戸にかいはさみ置きたるを、世
のえせもの（碎物）の取りて歸りにけり。またの年行きて見れば、こりず
まにかいはさみ置きたり。かく白浪のよるくごとくに數も積み
しかば、遂にこの卷々となりぬとぞ。この藻屑の端つ方に、月と花
との事ながくしく書いたれば、それをもて名たてしは、かのえせ
もののせしことなりとぞ。「海人のさへづりとこそ言はまほしけ

わの村にソリ
ん、ソリ
（北へつをえと）
（こりなつて）
（かきそへた）

れ。」と里の子は言ひき。

二 月のさしのぼる頃

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるに、や、匂ひそめたれど、遠山の梢にいさようて姿も見えず、からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが近寄るほど、あやにくに月の方より雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こはいかにせんと暫し打ちまもるに雲の端つ方あかう見ゆるにぞ、出離れたらばはやかゝらん隈はあらじと思ふに、いつのまにか、また白雲の月待顔にたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれて打見るに、はじめの雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけし。かの待ちゐたる雲にむかへば、また馳せいるもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。

こよひの月夜云
わたつみの豊旗
雲に入日さしこ
よひの月夜あき
らけくこそ(萬
葉集)

三 代々の亂れ治るきは

こかしこにそれと面影見ゆるにぞ、ひたすらに恨みはて見居たるうちに衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくと向ひ居たれば、心のはてなきやうにこそ覺えしか。情趣を味かん、綿の糸、限りかた、新し、感んじら水
ひでり續く頃は、こちかぜ吹きて雲の出でたるにぞ、さらば今日こそ降りいづらめと見るに、その風もいつしか止みて、雲もむらむらとたえ間がちになれば、はや日の影のきらめき出でぬ。また雨の降りつゞく頃は、松吹く風の音いさぎよくて、はや霽れなんと見れば、雲間もはやむら／＼と青く、入日の方はこちたきまで紅深く見ゆるにぞ、「こよひの月夜あきらけくこそ。」と思ふに月出づる頃は雲出でて、また玉水の音するものぞかし。代々の亂れ治るきはも、わが心の上もこの如きものとかや。

(五十歩 百歩)

四 えみしの人

えみしの人に飯を與へければいと喜びながらそこら食ひこぼしてけり。「やよ、米は玉の緒つなぐものなるを、などかくおろそかになすか。」といへば、「われ等は、米食ひて命をまたうするにはあらず、鮭といふいを食ひて生くるを。」といふ。「さて、鮭のいをにて命をばのぶるならば、それをば尊ぶべからん。いまその足に穿きたるものは、鮭の皮ならずや。」といへば、しばし頭かたぶけて、「君の足につけ給ふわらうづとやらんは、かの米の出でくる草にはあらずや。」といひしにぞ、「侮るまじきことよ。」と人のいひきとぞ。わが國の人は他所の事を知らねば、えぞ人のなりかたち、わが國の人は違へば、いと愚にて何も知らぬものよと思ふたぐひぞ多き。それより唐國にてもあれ、えみしの人にてもあれ、たゞ姿の見馴れぬを

天つ風の
沖波

浅草寺
浅草區藏前通の
端にある。
俗に浅草の観音
といふ。

見ては腹かゝへ、言葉のわきがたきを聞きては又笑ふ。「心せばく他所見ぬ故なるべし。」といひぬ。

五 はや鍋はや鍋

年の暮に浅草寺のあたりに市といふ事ありて、ことに人多く出づるなり。或人薩摩の國より鮑の貝おほく買ひ求めてけり。その貝の穴を木もてふたぎ、木もて蓋を作りて、その市にて賣らんと計りけるが、折節さはる事あれば、人に頼みて、「晝つかたには來るべし。それまでに賣りてたべ。」といふにぞ、もて出でて賣るに、かへりみる人もなし。さればよ、かうやうのもの此の市にて賣りしたためしなきを、えうなき事に時費すものかなと思ひつゝ、いかに賣れども買ふ者なければ、往來の人の袖ひかへて、「これめさせ給へ。」などいふに、引きはなちて行くめり。晝過ぐるころ、かの人來りて、「いかに」

と問へばかくといふ。「何といひて賣りし。」といへば「別に何とかいはん。貝焼の貝めさせ給へとて賣りし。」と答ふ。彼ほゝゑみて「我が賣るを見給へや。」とて、いと聲高に「はや鍋はや鍋」といへば、過ぎゆく者は立還りて買求め、そこら行く人も聲をとめて買ひぬ。見るがうちに多くの貝を皆賣りてけり。この市は人多く出づれば、殊にかまびすしくて、靜に心とむる者もなければ、手桶賣る者は「さはら、さはら」といふ。さはらの木もて作りし手桶よと言ふ暇もなく、聞く暇もなしとかや。物の勢といふものも、また理の外なるものなりけり。

六 月の夜半

「月の夜半こそ、思ふくまもなく心のそこも澄みわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風たかく吹き

かふは、また優りぬるやうに覺ゆ。」といへば「雨ぞいとまきりぬるを。」といふ。「いかに。」と問へば「いでや、早天の雨はさらなり、草木の花咲き實るも皆この恵にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そほ降りて霞みわたりたるは、げに春やとぞ思ふめる。師走のみそかのどやかに降りたるも、春待顔にていとをかし。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが、衣濕せども降るとは見えぬ。軒の玉水も間遠に音して、棲み捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭のおもの枯生の底に緑や、添ひ行くも、柳の絲のうごきもやらで露そふも、ともにいと長閑なり。燈火挑げても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄みわたりぬるものぞかし。その外梅の香のしめり、夜深く匂ひわたるも、花にうし。」とかこちぬるも哀はありけり。春も老いゆくころ、蛙の時得顔に

すだくもをかし。杜鵑の初音をいかにと思ふころ、村雨のはらはらと降りいでたるも、五月雨の幾日も降暮してふみの巻々繰返しつゝ居たれば、何となく世の中のことにも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬるころ、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹落ちたるに、柳蓮葉などの葉裏しろく見せたるもすゞし。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降りきて物音も聞えず、土のほひきたるもいと心地よし。軒端は玉の簾垂懸けたらんやうに、玉水のたえまなく落ちたるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし又は水はしらせたるに、人々しばし物言はでうちまもり居たるもをかし。やゝ雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌拾ふさまなり。はじめ雲のたち出でし方は、はや空のひとしほみどりに見えて、虹など見ゆるに、木々のみどりの庭濼に

かげ見ゆるもいと涼し。老いたる女など雷の音におどろきて這出でたるが、『今日のは若かりし時のごと、よく霽れにけり。今時のは、かく霽るゝこと稀なり。』なんど、はや繰言いふもあり。『かれはかくあわてき。』などいひて、かたみに笑ひとよみつゝ、『今日は蚊も少かるべし。かみの音もいとかすかなり。このごろの暑さも忘れぬ。』とて端近う出づれば、夕月の光さしわたりて草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙のものまち顔に空うちらみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋くるころの雨は昨日にかはりて、何となうさびし。萩の上風、外山の鹿の音など、月よりも身に沁むこゝちぞする。常に聞きなれし筧の水の音までもあはれ深くこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいて、やゝ夜寒のころ鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕近く鳴きよるもあはれなり。『この雨に木々も染みなん。』と思へば、『茸な

どもおひ出でなん。栗もはや落つべし。』などと、わらべの物さびしげに燈火にむかひつつ言ひいづるも、げにさま／＼なり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、鐘撞く人の心までもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊のうつり行きて一盛見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつき／＼し。朝顔のみな枯れたる中に、さ／＼やかに赤う咲きいでたるが、ひる過ぐるまでも萎み後れたる、又あはれなり。野分の風はおどろ／＼しきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀を添ふるは秋のならひなるべし。時雨のさと音しく夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりもあはれ深きものには侍らずや。』といへば、かうやうに云ひ並べてはげにもと言ふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この

雨はをとつ日より降りいでしをと思ふ心はかはらじ。と心の中に思ひて聞き居しも、またをかしけり。

七 理の如くせば又病をも得べし

「夏は麻の衣を着るべし。冬は綿入れし衣重ぬべし。」といふはことわりなり。されど、伏陰あるをりは、夏も綿入れし衣着ることもあるべし。冬も愆陽ある折は、ひとへあはせの衣をも着るべし。さるを、ことわりの如くせば、また病をも得べし。今の世、たゞに理のみいひて、國を治め人を治めんとするものは、かゝる事やあらん。

八 那須、與市

「那須、與市は弓の上手にてもあるべけれど、馬を海に乗入れて、風にうごきて定らぬ扇を射んといふは、いと難きことなり。射損じな

伏陰 夏の時節に不時に寒さが現はれること。
愆陽 伏陰の反對。
冬無愆陽 夏無伏陰。
（國語）
那須、與市 名は宗高、義經に従つて屋島の合戦で扇の的を射た。

ば死ぬべしといふも、さもあるべき心なるべし。たゞ扇にのみ心ありて放ちたりとて、必ず中るべしとも言ひがたかるべし。さるに心にたちかへりて神に祈念したるにて、心はうちにとゞまりて外へ馳せず、つひに思ふ矢つぼたがはざりしは、わが心の誠にかへりて神明・良能の妙の出でしなり。」と言ひしが、さあらん事もありぬべし。

九 昔の鎧と今の鎧

「昔の鎧と今のとは、いかでかくまでは違ひしにか。」と問ふ人ありけり。「このわかちは、代々の昔のふりをよく心得ぬれば明かなるを、さはせて、軍といへば元龜・天正の頃の近きことのみ聞き覚え、昔の事書いたるをば、『かゝる事ありしか。』など夢物語のやうに心得て、このごろのさかしら人の記せるものを、まこととして、今の鎧

元龜・天正
正親町天皇の時
(織・豊時代)の
年號。

打物(大丸梳)

のよきなど思ふたぐひぞ多かる。まづ古の軍は一人々々道をみがき、名ををしみ、譽を後に傳へんことのみ思へば、みおやの事より言ひいで、みづからの名を呼ばはりて出づれば、敵の方よりも劣らじとおなじく名乗りて出で合ふなり。されば、かたみに物音もせず、目のごひてこれを見る。その打合ふなかに、『いで組まん。』とこゑかけて、打物棄てて寄來れば、力かひなくして必ず勝ちがたからんと思ひても、さいふ時に組までは名を汚すにぞ、命棄つる道に二つはなしと思ひきはめて、己れも打物棄て、組合ふなり。組みしかれて首取らるゝまでも、しづまりかへりて見ることなり。敵より組まんとて打物棄てたるところを斬らば、たやすく斬り得べけれど、名けがれては武夫のうち立ちがたく、殊に必ず罪せらるべし。されば、遠矢に大將など射るも、みやたき事なれば、それがために聲かけてのちに射ることなり。かゝればこそ、代々譲り傳へ

身にあはぬ直衣云々
齋藤實盛が最期を覺悟して出軍する時、錦の直垂着ることを願つたのをさしてゐるのであらう。

相生・相尅
五行の運行で、木から火を、火から土を、土から金を、金から水を、水から木を生ずるとしこれを相生とし、その反對に木は土に土は水に水は火に火は木にこれを相尅といふ。

てし鎧をも着いさゝかも後に名をのこさんと心ことに引繕ひこれぞ最期の軍と思へば身におはぬ直垂まで請ひえてましと思ふ心のみなれば鎧もいまの如くことそげたることはせざりしなり。そのふりもやゝ衰へてより馬を射て敵を討止めんともしあざむきたぶらかしても勝ちてんとするより多くの人とりこめて討ちしことも後よりひそかに來りて討止めしこともありしなり。ゆゑに昔は鎧の弓手のかたと前のかたとばかり心こめて作りしが源平の頃よりははや前も後もひまなかれと作り立て兜の鉢もまへうしろ同じくつくりなせるをもてその時世を見る事とまでもなりにけり。それよりして南北朝の比よりは愈みだれたるふりになりてけり。室町の比に至りては華奢よりして高上のことわりをも加へかの相生相尅などいふより七星五行の數などに引きかけてことむづかしく言ひもしたり。田舎の武士ども皆まづし

七星
貪狼星、巨文星、祿文星、文曲星、廉貞星、武曲星、破軍星。
五行
木火土金水。

きに作りなすものもなく物具かゞやかす力もなくて京風の華奢高上なるをあしざまにいひて、『軍とてもたゞ命棄つるのみにて難いこともなきものをさまゝの絨毛の鎧などいと女々しき事よ、』とて吹返もひねりかへしとかいふになし中には鎧も着ず澁染の羽織てふものなど肩にかけて出づるをいと高く潔きことのやうに覺えて、『まことの士はかくよ。』といふさまになりけり。それよりそのころの大將の鎧のいといやしきを後に見て、『大將と見受けられざるやうに雜人にひとしきを着給ふものなり。』とあまりなる事にまで言ふことにはなりにけり。すべて世の中のならはしのくだりもて行きしことをばこれを見てもかれを見ても知るべし。』と答へきとぞ。

一〇 花の咲く頃

花の咲く頃雨の降出てたるに、風さへ添ひぬれば、必ず花の時雨風のうさ添ふならひにて、人の世の別れ離るゝことわり見することにこそ。さりとは、つらき雨かな、うき風かな。」といふを聞きて、「雨降るとても、五月雨のやうにはあらず、はげしとて夕立のやうにはあらず。風添ふとても、秋の末つ方の野分または木枯のやうにはあらぬものを、花を惜めば、ことさらに雨も風も世になきやうに思ひ給ふか。」といひき。

一一 痕おしなでて譽む

何にかへじと思ふみどり子の這ひまはるを見て、げにこの子は行末さえも秀でぬべし、乳房見すればひたすらに這ひ行くめり。心にさからふことあれば、ありあふものもて人を打つ。わがこの頭の疵を見給へ。この子の煙管もて打ちし痕なり。親とても心に

たがへば、かくするぞ心のすなほにはある。年のほどより力もありて、この疵をいでかしにけり。」と痕おし撫でて譽めぬるを、愚なるものも笑ひにけり。笑ふ人よりは賢き人なるが。

一二 四つの時のうつりゆく景色

四つの時のうつり行く景色こそ、またなくをかしきを、咲かざるをりの花を咲かせんとし、散る頃に散らさじと思ふは、いとくるし。散れば又こん年は咲きぬべし。いかに心を苦むとも、霜白く氷堅きをりに蓮の咲くべきことわりなし。されど、咲くを待ち、散るを惜むは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

一三 かゝる時黄金持ちて何にかはせん

いやしき者なりけるが、常食ふべき米をも食はず、ひさぎて黄金にかへて、命にもかへじと袋に入れて持ちゐたるに、秋の末つ方にはかの水出でにければ、かの袋をくびにかけて高き所へ行かんとするに、はや水嵩たかくて行くべきやうなれば、せん方なく木に攀ぢのぼりてけるが、殊の外に飢に臨みけり。さるに、米いさゝか苞にし負うて水遊ぶ者を見て、かの袋の黄金を見せて、「これを皆まゐらせん。その負ふ所の米いさゝか分けて給はれ。」といへば、いと怒りて、「にくきをこの言ひざまかな。かゝる時黄金もちて何にかはせん。」と言棄て、遊び行きしとなり。

一四 物をつくして言ふべきには非ず

雲の上のやんごとなき君おはしましけり。その御子の御傍にましましけるが、そともより風の吹來て燈火の光定らざりければ、人

召して、「風の吹來るぞ。燈火消えなん。さうじたてよ。」と言ひ給ひければ、父君ことに怒り給ひて、「さやうなることばづかひしては、歌はいかでか詠むべき。」とてむづかり給へば、御子はいと恐れてしぞき給へり。御次に居たるもの、いかゞしたる御教ぞと思ひて、御色うかゞひて問ひ奉りければ、「物を盡して言ふべきものにはあらず。」と宣ひきとぞ。

一五 二人の使者

二人連れだちて、相見る人にあひて、「君の仰によて、こたび旅立つ事あり。いかに侍らん。見給へ。」といひしに、相者見終りて、「二人とも必ず、旅にて難あらん。慎み給へ。」といひぬ。一人は、「いそぎの御事なれど、旅の道にて難あらば、おのづから君の仰も滞るべし。遅くとも難なきに如かじ。」と燈火消つ頃、宿を出て、日の暮るゝ頃

には宿りをとる。一人は「とみの御使なり。慎むとは君命を慎むには如かじ。この身はたとひ難に遭ふとていかゞはせん。」とて星を戴きてやどりを出で燈とりてやどりをとる。されば、ことに早く思ふ方に着きければ、君よりも賞を得たり。一人の方は「遅し。」とて罪にあひにげり。されば、相はともあれ、わがすべき所をつとむれば、難なきものよ。」と言ひてけり。

一六 心にて見給へかし

「鳥鶉をもて蠅といふ蟲を多く捕りたるを、ふと、けみきやうとて眼も及ばぬものを見る眼鏡のあれば、それもて見しに、その鶉につきたる蠅が、逃げんとして羽を動かすが、はてはそのはねも鶉につきて動きえず。かうべ動かして苦むもあり。又久しくつきしは、飢にのぞみて弱り死するけしきもあり。たゞに羽を鳴らす音のみ

聞きしが、よく見ればいと悲しきさまなりき。」と語るを、「さあらんよ。」など人の答へしを、「見しと聞きしとはいと違ふものぞかし。見し如く聞き給はば、『さあらん。』などとばかりは言ひ給はじ。まいて眼の及ばぬあたりの事は、なほ心にて見給へかし。」と言ひし者ありけり。

一七 ある醫師

ある醫師ありけり。病む者あれば、かみしも選まずいとせちに心を盡しけり。いといたう賤しき者病めるありけり。藥箱出いて藥調ずるに、その母なりける老婆のつく／＼と見て居しが、いざり出でて、「はゞかりなることながら、ねぎおもふ事こそ侍れ。」とていと言ひかねたるを、「何の事にもあれ、思ふことは打ちあらはして言ひね。」といへば、つゝましげに聲ふるはして、「下に組みおき給ふ

箱の御薬も賜はれかし。」と言ひけるにぞ、思はずほゝゑみて、「さらば與へん。」とて下にありしがうちの障なき薬二つ三つ取出でて調ぜしが、「必ずその薬はしるしあるべし」と語りぬ。かく愚なる者に、「この病には何といふ方劑調ずることなり。それは何々の薬を用ふ。この箱の上の方におのづから入れおきたれば、取出して調ぜしなり。下に組みたる箱のとて貴き賤しきの隔はなし。」とまめだちて言ふとも、いかで聞きわくべき。さはりなくば、その心に任するにてこそ、をかしかりけれ。

一八 月なき夜半

月なき夜半は、いと心の底澄みまさるものなりけり。海のおもて暗うして、寄來る波の音ゆたかにして、磯邊の松にも音せぬ風の袖にそよと吹きかふに、晝の暑さも忘れぬべし。秋はなほ蟲の音も

きそひ行くに、千草の花の色も見えて、沖漕ぐ船にまがふ雁がねの渡るも、いづこなるらんと哀なるに、浦のあしべに聲あはせたるもをかし。まいて曉頃に月の出づれば、宵の入日の残れるたぐひにはあらず。海のおもて黄金の波の満ちくるにぞ、言葉にもものぶべしとは思はぬ。昔いぎたなくて、有明の月にうとかりし頃もありけりと思へば、口惜しきものから又羨しくも思へり。それより思の移り行きて、げに古はあしき波にも舟浮けて鯉釣りしこともありき。又はいと寒き頃海に入りて鮑とりしこともありしが、今のわかうどは、まだきに老いぬるさまするものぞ多き。その頃の昔物語に聞けば、「浦曲の戦のおそろしさに、妻子打連れて深山へ入りし世もありき。」と聞きつるに、月なき空にも心のたのしびを極めぬるは、いかにぞや。かゝる事もかのわかうどの老いたるさまするをも、あはせて言はまほしけれど、また例の老いぼれて繰言いふ

とやむづかりなん。

一九 日新の教

「おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかる事にもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふはものかは、事々に新に、物々に新なるべし。昨日の事に馴れて思ひあやまるも、かねて知れる事と思ひてやぶれとるも多し。かの賢き人も、女などに迷ひ、愚なる人に欺かるゝも、ひとつひとつに新ならねばこそありけれ。昨日にくしと思ひし事心にそみ、去年のうれしと思ひし事心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、よろづにかよはして身を終ふるまでも忘るな。」と語りし老人もありけり。

二〇 鳶の子

鳶の子のすだちする頃、兄鳥の巢より飛出でしに、弟のは羽もいまだ整はざるを知らず、つひに飛びたれば梢より落ちてけり。親鳥いかに思へども、形ははや親にまさるばかりに羽のふくらかにおひたちたれば、せん方なく巢に入りて呼べども、もとより飛得ざれば、立返るべきやうなし。二三日たちて見るに、同じところにくままり居たり。捕へて見れば動きもやらず、いと飢ゑに飢ゑたるさまなれば、一夜さまざま、餌を與へてけり。あけの日は餌をやらんとすれば、恐しき姿しておどす。昨日は飢ゑてければ、その心も出で來ざりきと見えき。人をおどすはにくけれど、このまゝにして殺さんも忍びずとて、はぐゝみやりけり。二十日ばかりたちてければ、羽もよく整ひぬ。さらばとて、もとの木蔭に連れゆきて、籠よりやをら出したれば、おのれからうじて逃出でしさまして飛

行きぬ。親鳥も人のかくしてかくは放ちしは知らず、かしこく籠を遁れ出でしよと心得しさまして、連れていにけり。

二一 利害得失

事に處するに、利害得失に心をつくるも宜なれども、まづその事の筋をよく見て、さて利害得失をも照し見るべし。世にいふ才あるものは、まづわが利害得失はやく見ゆれば、利に就き害に遠ざからんとのみして、その筋を失ふなり。たゞ害ありとも、かくすべしといふはいといたう重き筋の事なり。されば、その筋の重きと輕きと、利害の重きと輕きとをかけ合せても、その筋の方重きは害にあふとも、その筋にしたがふべし。また才なくして筋にも暗く、ただ一筋に心得るものは、筋の輕きにも重き害を得て辭せずとするもありぬべし。才ありても道まねびて明かなるにあらざれば、輕きを重しとして、つひに道失ふものこそ多かめれ。

二二 今參のをうな

田舎より出でたる今參のをうな、年もいと若かりければ、人々何くれと欺きなどしけり。黄昏の頃つかひに出でぬ。「歸らん頃はまだ暮れじ。かれを驚してん」と門の内なる柳のいと茂りたるあたりへ、白き衣引纏ひ女の髮亂せるやうに作りて置きけり。物のけぢめもさだかならぬ頃歸りにけり。柳の前を通りたらば、聲あげて逃げ惑ふべしと息を殺して垣間見居しが、何とも言はで過ぎにけり。「柳のあたりにはこの頃變化の物の出づと聞きしが、もしや見し。」と問へば、「げにも柳のあたりに白き衣着し女の立ちて居しやうに見き。」とて驚くけしきもなし。「いかにして恐しくは思はずや。」と問へば、「都へ出づる頃、垂乳根のこの觀音の御守と北野

北野
北野天満宮のこと。
北野天満宮は山城國葛野郡にある神社。

のとは膚離さでよ。』とて、袋に入れて賜ひぬ。變化のものあらば、
觀世音も北野の御神もましまさん。かれわれを殺さんとせば、守
り給ふべし。神も佛もなき世ならば、變化のものもあるまじと思
ひしなり。』と言ひきとぞ。

二三 生々の徳

深川の八幡
東京市深川區に
ある。

深川の八幡の社の祭ある日、多くの人見に行きけり。二つ三つば
かんなる子を抱きて母の行きたるが、大きな橋あり、渡らんとす
れば、その子のひた泣きに泣きて止まず。橋を渡らじとかへれば、
泣止みつ。「いかにしつることよ。」とてさま／＼にすれど、初にか
はらず。「まづさらば、こころに息ふべし。」とて橋のかたはらに居
たるが、しばしして橋の上の人騒ぎ立ちて、聲のかぎりに呼びつゝ
あわてふためき迷惑ふ。いかなることとも分かず。よく聞けば

「その橋の半より落ちて、渡りかゝりし人千人ばかりも落ちぬ。」と
なり。それを聞くより、かの母も覺えず涙落ちてけり。「いかにし
てこの子の知りつらん。神佛の助けたまひしなり。」とて伏拜み
つゝ、急ぎ歸りにけり。その子のみかは、その母も知りたれども、た
だ私の心におほはれて照し得ぬなりけり。もとよりその災に遭
ふものは、おもてにも溢れて、そのあしき色をあらはすべければ、心
の鏡ははや照しけんを、知らざりしなり。こは蟲けらもその生く
る道を求め、死すべきを厭ひて、殺すに心なきものには、馴近づくと
ぐひは、これおのづから生々の徳そなへし大空の御心にて、それを
享け得し萬の物皆かくあるべきことなり。されば、うらにあらは
るゝも、龜やきて見るも、皆天地のうちにあるとあるもの知らざる
はなく、感ぜざるはなければ、聖も一つの教とものし給ふとや。

生々の徳
生生之謂易。天
地之大徳曰生。
(易經)

二四 辟すれば正しきを失ふ

人を知るは、かたよりなき處より明かなり。かの辟すれば正しきを失ふ。いかでわが心くもりて人の心を照さん。わが才智機轉にて照さんとすれど、時にとり暗き時あり、いかで照さん。

二五 若々とあらまほし

家國の姿は、若々とあらまほし。もし年老いたる姿になりもて行かば、物事沈みはてゝ人に見知られじと、物の色目も花やかならざれと思ふまでになり行くぞかし。その心よりして、人に秀てんのも心もとよりなければ、物の堪能上手もたえはてぬるものとなん。

二六 天命

「膽をねるといふは、いかにして得てん。」と尋ねしに、「天命を知るに

獨寢衾に云々

蓮瑗不_レ以_レ昏行_一
變_レ節、顔回不_レ
以_レ夜浴_一改_レ容、
獨立不_レ慚_レ影、獨
寢不_レ愧_レ衾。
(劉子新論)

あり。この知るは眞に知るをいふなり。只黄金などの欲は去易し。好名の欲ぞいとかなしき。古にも君父の命に背きて身を潔くし、朝廷の事を謗りて直をうる。これを忍ぶならば、何か忍び得ざらん。』とまで古より言ひしをや。唯その天命を眞に知りて疑ふ事なければ、つゆも心の煩なく、塵ばかりも穢なし。『獨寢衾に愧ぢず。』とかいふ。かの浩々たる氣ともいふらん。』

二七 鷹の羽に棲む蟲

鷹の羽に棲む蟲ありけり。空高く飛び翔る時は、遙に人の住家などを見下しつ。『げにわれは事足れる身かな。翼も動かさて千里の遠きに行通ひ、雲居のよそまでも揚るめり。殊にさまゝの鳥は皆おそれて逃走る。げにもわれに勝つものは大方あらじ。』など思ひつゝ、かの鷹の毛のうちに居つゝ、頻にしゝむらを刺し血

花月草紙

二四 辟すれば正しきを失ふ
二五 若々とあらまほし
二六 天命
二七 鷹の羽に棲む蟲

を吸ひて居しが、そのやからいと多くなりもて行きしにや、つひにその鷹も斃れにけり。それより自ら出でて飛び翔らんと思へども、飛びえず、走らんと思へども、速かならず。血も盡きしむらも枯れぬれば、今は命つなぐやうもなし。からうじて、まづその毛のうちをくぐり出でて這ひゆけば、雀の子の居たりけり。「われを恐れなん。」と見れば、雀の子は知らぬさまなり。「いかにして見つけざるか。」と傍へ這ひよれば、うれしげに見て嘴さし出して喙まんとす。「例なきことなれば、おそろしくて逃隠れぬ。」とかの友どちに語りにけり。

二八 桀紂を引きてなだむ

「わが悪しきをば桀紂を引きてなだめ、人の善きをば堯舜を引き出でてとがむ。『かれはかゝる悪しき事なしぬ。』といへば、『げにさ

桀・紂
夏の桀王・殷の紂王。

あらん。』といふ。『このものかく善きことし侍りぬ。』といへば、『いかゝあらん、いぶかし。』といふ。げにも人は悪しき心あるものかな。』といへば、「善き名得まほしと思ふが故に、人の悪しきにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出でくるなり。」と言ひき。

二九 隅田川原の花見

今日はいと長閑なり、いでや隅田川原の花見んと、小舟に乗りて、行きたるが、花見んと立出づるもろ人のさま、げに都のみやびを盡せり。さまざまの心々に打むれて行くに、女房なども何か口たゞきつゝ、心空にありくもあり。馬馳せて花をも眼にかけず、いとばうぞくに行くもあり。やごとなき人にや、人々うち圍みてつゝ、ましげに行く女もあり。あるは木かげにて、はや瓢傾け、何やらん、やたて出し書いつけ、かうよりして花の枝につけて、われはがほなる風

情なるもあり。今日はげに晴れに晴れて一天に雲なく、富士も筑波も手にとるばかりに見えたれど、またそれを打眺むる人もなし。ましてかく晴れたる日は、とみに雨風のあるなどいふことは、つゆ思ふ者もあらじかし。この長閑なる御代の春の御恵にぞ、かく心ゆたかにたのしび遊びて、かへさ忘るゝばかりしても、何のわづらひうれひもなきに、この花も昔よりつきぬ御恵深き露に生ひそひきとやらん聞けば、さ思ふ人もありやなしやと見れど、王世の民の心とや、かゝる照る日の恵をば思ひも寄らず、いつもかく空晴るゝものとはばかりも思はぬ輩多からんなど思ひかへして、四方をふと打見れば、筑波根のあたり、いとほそくひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世にはやてなどいふものなりけり。あまりに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねて簑も笠もはなたて居しが、はや艫おしたて漕ぎかへるを、いかに、この花を見棄ててかへ

筑波根
常陸國筑波郡に
ある山。

かりがねに云々
春霞たつを見ず
てて行く雁は花
なき里に住みや
ならへる。

(古今集)
艫の音ばかり云
云

秋風に聲をほに
あけて来る船は
あまのと渡る雁
にぞありける。
(古今集)

るはかりがねにつらさやならへる。艫の音ばかりまなべよかし。』
など口々にわらふを耳にも入れて漕去りぬ。いつかその雲のい
とひろごりてけるが、かの輩は露も知らず。日のかげろふも知ら
ず。今日はあつきばかりなりとて、肌ぬぐもあり、または衣などぬ
ぎて馳せありくもありぬべし。雨にさきだつ風のひと通り吹落
ちたれば、こは花よと思ふ間もなく、いさご吹立てたれば、たゞ驚き
て居るが中に雨の降り出たり。初は心地よき雨などともいひた
らんが、後には人の聲に雨の音もせず。馬を馳せてかへるもあれ
ば、おどろきあわてゝ堤よりまろび落つるもあり。女などはいと
いたう見苦しきまであわてふためきて、はじめ装ひしをも自ら夢
とや思ふらんさまなり。まして酒に酔ひて濡るゝも知らず顔に
笑ひなどするもあれば、「思ひ寄らぬおろかなる雨かな。」と怒りの
ゝしるもありぬべし。かの舟は早く漕ぎゆきぬれど、わが住む浦

は遠ければ、とある橋の下に舟とめて居しが、橋の上など人の走りさわぐは、なるかみのやうに聞えぬ。はや雨もかぞふるばかりに川のおもに見ゆる頃、夕月のことさらに新しく磨き出でたれば、はや雨の名残もなし。堤の花いかゞあらんと漕ぎかへして見れば、その頃ははや人もなし。櫻の木の間にほのくくと月の見えたるは、わがためにつくりなしけんと思ふばかりなり。濡れにし人はいかゞしたりけん。この月などは思ひも寄らであらんなど、ひとり思ふも何となく心おごり行きぬ。かぞいろもわれひとり人にこえて心地よしと思ふときは、「といましめ給ひたれば、またあやまちやしぬべくとおそろしく覺えければ、飲み残したる酒携へてつひに漕ぎかへりぬ。」

泊渚文藻

清水濱臣の文集、四卷ある。濱臣は號を泊藻舎といひ、江戸の國學者で、村田春海の門人、文政七年、四十九歳で歿した。

四つのおきて文昔の制度たる律令格式のことを記した書。

錦織の屋村田春海の號、文化八年歿、六十六歳。

二 泊渚文藻

一 琴後集序

世に歌よむ人多し。或はみじか歌に巧に、或は長歌にかしこく、或は文書くわざにすぐる。世に古學イロハナヒする人多し。或は御代々々の書を明らめ、或は四つのおきて文に委しく、或はあがれる世のふることぶみに心を深め、或は後の世の物語書を枕ごとくす。其の人人に問へば、彼に委しきはこれにおろかに、此に思ひ入りたるはかしこに心浅し。しかのみならず、やまとさうしの上には口さきききゝたるも、唐ぶみに向へば爪くはるゝ類多し。まことそれもことわり、誰やし人かは皆がらかね備へたるあらん。わが家の佛貴ぶにはなけれど、この道々に行通りて、萬づたどくしからぬは、獨り吾が師、錦織の屋の翁のみなむおはしける。翁こゝの事はすべ

縣居の主人

加茂眞淵、國學
四大人の一、明
和六年歿、七十
三歳。

服部仲英

江戸の儒者、南
郭の養子、詩に
有名。

鶴殿士寧

幕府の旗本で儒
者、安永三年歿、
六十五歳。

皆川伯恭

洪園、京都の儒
者、文化四年歿、
七十歳。

安達文仲

名は修、下野の
人、南郭の門人、
寛政四年歿、六
十七歳。

て縣居の主人に問聞かれたるよし、誰も能く知れる事なればいは
じ、唐學は、始め服部仲英ぬしに名簿ナツキおくられしを、仲英ぬし身まか
られては、鶴殿士寧ぬしに従ひ、中頃都に上りて皆川伯恭ぬしに問
ひきかれし事多く、又後には佐々木學儒、安達文仲などいへる世に
勝れたる博士たちに、あしたゆうべ睦び伴はれしかば、唐歌にも其
の名聞えて、なま／＼の博士口あかすまじくなんおはしける。翁
世に求むる心なくして、やむごとなき御前わたりに召さるゝ事を
好まれず、唯花にあくがれ月にうかるゝ外には、朝夕文机のもと去
らずおはして、筆執る業にのみ明し暮らされしが、ともすれば物學
びする人の爲に妨げられ、かくすれば病の床に起臥して、思ふ事い
はで已まれたる事少からず、書きさして事終へられざりし者數あ
またなりき。歌をのみたてゝ物せられしとはあらねど、自らこ
の方にて世に知られ、人に用ひられつゝ、やう／＼天の下高きも卑ヒ

千蔭

橘千蔭、號を芳
宜園といふ。江
戸の歌人、文化
五年歿、七十五
歳。

きも長きも短きも老いたるも若きも、知る知らぬ歌よむ人とだに
いへば、千蔭春海と口にいはざる者なきやうにはなりにけり。其
の歌の姿、芳宜園のをぢは勢雄々しく、詞はなやぎたるを好まれ、翁
はさびたるさまのこまかにしめやかなる節を心とせられにけり。
文詞は趣を唐モロコシにかり、詞をこゝに移し、ふることを求めずさとい言
を省き、新しく一つのさまを思ひ構へられて、わきてめでたくなん
物せられける。世の人翁をたゞに歌よみと思はんも翁を知らぬ
なるべく、また唯に唐學モロコシマナビの博士なみにのみ思はんも翁を知らぬな
るべし。翁若くしてなりはひの道に疎く、遂に家をはふらかして、
百千の寶を失ひ、はては事足らぬがちに年月を送られしかど、老い
て後、言の葉に富み學マナビに富まれたり。いでや百千の寶はたゞ暫し
生けるが程の富なり。言の葉と學とは、とこしへに亡き跡までの
富なり。翁寶に貧しくおはせしかど、言の葉と學マナビとに富まれたり。

神功紀に云々
則命^{武内宿禰}
令^撫琴。喚^中
臣烏賊津使主^三
爲^神神者。因以^三
千繪高繪^置琴
頭後^{詩曰云々}
(日本書記卷九、
神功皇后の章)
この琴頭後をコ
トガミコトジリ
と讀む。

山上の國つかさ
萬葉集中の歌人
山上憶良、靈龜
中伯耆守とな
る。天平五年歿、
七十四歳。

誠に天の下の寶の玉とは翁をぞいふべけれ、誰かは羨まざさん、誰
かは慕はざらん。今この言の葉のふみ世に普く廣がりて、あひだ
おかず學の書とも板に彫られゆかば、吾が翁を天の下の寶の玉な
りといふ事の詐ならぬ事知られつべし。そも此の集の名におふ
せられたる琴じりの詞は、神功紀に、琴がみ琴じりといふ詞のある
より思ひよられたるなりとぞ。(卷二)

二 萩をめづる詞

木の花は春に匂を盡し、草の花は秋を時とすれば、誰も皆春は山邊
をとめ、秋は野路にあくがるゝをこそ遊の道の常とはすれ。抑、花
野の秋に咲亂るゝ千草は、とをはたみそよそと、其の數多かめれど、
是はしもと取出てゝ愛で弄ぶべきは、彼の山上の國司^{クニノカサ}のよみ置か
れたる七種になん盡きぬべき。そが中にも亦勝れたるは、何れと

七種の歌

秋の野に咲きた
る花をおよびを
りかき數ふれば
七種の花。
萩が花尾花葛花
撫子の花女郎花
また藤袴朝顔の
花。(萬葉集)
もろこし人も云
云
女郎花の異名を
支那で敗醬とい
ふのをさしたの
である。

古き歌にも云々
人皆は萩を秋と
いふよし吾はを
花がうれを秋と
はいはん。
(萬葉集)

か定めん 女郎花はいとなまめかしく懐しげなれど、唐人^{モロコシヒト}もなに
がしとか其の名をよびておとしめたるもことわり、花の盛なる程
こそあれ、はてゝはうたてあやしき香のそひて、花瓶に入りたる
なごりなどもあさましきまでに、鼻さへ打覆はるゝや。撫子は唐^{カラ}
に倭に色を交へて美はしくあてなれど、常夏にうつろはずして、秋
にまで咲きかゝれるが飽きたる方もあるべし。朝顔はいとらう
たし、朝ごとに色改むるなど心地清げなれど、これはまた見る程
もなく萎れ渡りて、露のひるまをだに待たぬが事足らぬ心地する。
葛は風のまにゝ吹返す葉末のうち珍しさこそあれど、はひ廣ご
りもうるさく、藤袴は匂のいひしらぬはさるものから、見立てなき
花のさまならずや。尾花ぞ古き歌にも「秋とはいはん」と詠みたれ
ば、あるが中にも優りたるやうなれど、廣き野末にめぢの限り高や
かにさし靡きたるは、白妙の袖とも誤たれて心とまる心地すれど、

二もと三もとが處せきつぼの内などに生ひたてらんは何のをか
しき節かあらん。いでや萩の花をみよ、秋の初風やうく身にし
み渡る程より、かつかつ咲きそめて、或はなだゝる大野ら、或は程な
き前栽、多くも少くも、やごとなき御垣の下にも限らず、葎はふ賤が
はひりをもきらはず、處えて匂ふさま懐しく、はためてたきに非ず
や。さらば七種の内にも優るべく、千草の中にも勝れたるは、此の
花をさしおきて亦何れとかいはん。(卷二)

三 擣衣を聞く

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも
又しきる。雁がねの聲の擣衣キヌダをさそふにやあらん、擣衣の音の雁
がねにかよふにやあらん。あなあやし〜。そもこの音の悲し
きか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆゑか、皆あらず、聞く人

の心のわびしきなり。(卷二)

四 漁父辭

秋吹く風に耳欬て、故郷の鱸のなます思ひ出でけん人こそ、げに
さる事とは覺ゆれ。岸の額に老の浪をたゝみて、直なる針に王公
の位釣り得し翁はうらやましくもあらずや。我はたゞ世を捨舟
に棹さして、山陰のしづけく、水草の清からんあたり、息の緒のか
ぎり心を遣りて、うへなき樂とはなしぬべきぞかし。(卷三)

五 植村正路を哭す

あはれ悲しきかもや萩の屋のぬし、あはれいたはしきかもや植村
のぬし。濱臣今申さん事あり、御魂天かけりして聞しめせ。
ぬしは己が心知りの友なり。ぬしは己が歌學びの友なり。ぬし

鱸のなます思ひ
いでけん人

吳人張翰、晉に
仕、故郷の鱸
を思出し官をす
てて歸りし故
事。

王公の位を釣り
得し翁

太公望呂尚をさ
す。

太公望之遇周
文、渭濱之波疊
面、綺里季之轉
漢惠、商山之月
垂眉。(朗詠集)

植村正路

橘千蔭の門人、
文化十五年歿、
四十六歳。

はおのが月花の友なり。ぬしはおのが酒みづきの友なり。ぬしとおのれと相知りそめて、今年まで二十年に過ぎたり。おのが友とする人だちすべて幾百たり、あるが中に年久しく、あるが中に隔てなく、あるが中に學マナビにらうあり、あるが中に歌にたけたり、あるが中にまめ人なり、あるが中にみやび人なり。ぬし歌よむ事をたしむ。おのれまたたしむ。おのれ古學びに心を深む。ぬし亦心を深む。ぬし酒飲む。おのれまた飲む。おのれ月花にあくがるゝくせあり。ぬしまたこの癖あり。ぬし手かくわざをよくす。おのれはよくせず。おのれは天の下のいたづら人にて、海山の歌枕を樂とす。ぬしはおほやけ人の數に入りたれば身を心に任せず。只この二つのみなんひとしからざりける。大方心合へるどちも、住み家程隔てたるは思ふがまゝに睦びかはず事なし。ぬしおのれと住家只是ひわたる程なり。大方心あへ

るどちも、齢いたく違へれば、隔つとなしに心おかるゝものなり。ぬしは四とせのこのかみなり。己は四とせのおとゝなり。かゝれば學マナビの道にもはらから、遊びたはれたる方にもはらからと親しみつゝ、晨に訪ひ夕べに訪はれつゝ、類なき睦びかたきなりき。此の近き年頃となりては、ぬしもおのれもうひまなびどもの道しるべする業に暇なくて、晨ゆふべに訪ひ訪はるゝ事自ら間遠になりもて行きにたれど、猶ことゝある時は、夜中曉といはず、古書に疑はしき事あれば問ひおこされ、古歌どもの中にいぶかしき節をば聞えかはしつゝ、なん有りける。さるにぬし去年の冬よりそこはかとなくいたづきそめられて、今年この年の春聊かおこたりざまに見えしを、遂に夏の半にはかなくも身まかられぬ。あはれ悲しきかもや萩の屋のぬし、あはれいたはしきかもや植村のぬし。ぬし今古い人を残し、うち君を残し、むすめ

子たち四人を残して身まかられぬ。先だつぬしの心、後るゝ人々のかなしみ、取集めて思ひやるにたへ難し。ぬしはらからおはせず、おのれ心の中にはらからのかなしみを盡さんとす。心のかなしみを盡すは花を手向くるにあらず、香を焼くにあらず。心のかなしみを盡すは只言の葉にあり。其の言の葉は、巧を求むるにあらず、飾を旨とするに非ず、只真心をのべ盡すにあるべし。かれ魂床の前ドミにうつ伏しにして、誅言シスレゴト申すことしかく。(卷三)

六 筆の跡を見てなき人をしのぶ

此の夏は、例よりも照りはたゞきて、いと堪へがたければ、何くれとなすべきわざもうちおきて、門守る犬のやうに喘ぎのみ暮しぬるを、いつしか秋風のそよと耳驚かすに、徒にかくてのみやはとて、ひぢ近なる厨子どもより始めて、塗籠の書ら數の限り引廣げて、日に

半は泉に歸す
往事渺茫都似
夢、舊遊零落半。
歸泉。(朗詠集)
萩の屋のあるじ
植村正路。

曝し風入るゝに塵箱の底にこめられてしみといふ蟲の住みかとなりにし反古どものいと多かるを、かゝる序に一つ二つととりつつ開き見るに、早くより睦びかはしたる友垣の言の葉どもの中を、およびを折りて其の人彼の人と數ふれば、半は泉に歸すとうちうめかるゝ中には、此の頃まで花にとひ月に向ひし萩の屋のあるじのなん、わきて數多く見出でたる。昨日まではありのすさびに見棄てたりしを、今よりは千とせのかたみと思ふに、そゞろうちまもられて流れ落つる涙の、水莖の跡にそゞぎそふる心地すれば、

残れとて残しも置かぬ筆の跡を

形見と知らで形見とぞみる

いでや光異なる玉の聲は、うづもれぬ名と共に後の世までも聞えて傳はらんものから。(卷三)

七 縣居翁の墓參會に

おのれ人に異なる一つの癖ありて常に夢みる事をおもしろみ、夢見る事を樂しむ。しかはあれど、よき夢見たりとて人に誇り語らんとも思はず、悪しき夢見しとて夢ときにあはせて物にかへうつさんともせず。おもしろむしるしにや、ぬる夜として夢見ぬ夜なく、樂しむからにや、はかなき事らも能く心の底に覺えて忘れず。如何なればおもしろく如何なれば樂しきぞといふに、夢といふものは思ふ心より見るとはいへど、いとゆくりなき事をのみ見て、思はぬ野山にもさまよひ、知らぬ昔人ともむつ物語し、或はをかきき事、或はおそろしき事、或は苦しき事、昔かと思へば今、今かと思へばむかし、げにうつゝなきものになんある。さはいへ、夢といふもの絶えてなからましかば、よるは只徒にいねたるのみにしてひたすらに死せるに等しかりなまし。よしやはかなき夢心地にもせよ、

錦織の屋
村田春海。
芳宜園
橋千蔭。

是を見て忘れず、是を見て樂しまば、いねし程も起きゐたらん心地して、五十年の命も百年の齡に思ひ比べられぬべし。徒に死せるが如きに勝らじやは。己が夢好みは、こゝに思ふ心ありての事なりけり。まことや、いにし世を忍び過行ける昔を思出づれば、すべて何かは夢ならぬ。悔しく過ぎし昔語は、取返さんにもよしなく、語り出でんもやくなき事ながら、己いと若くて、廿に三つ四つたらぬ程より、錦織の屋のあやなる手振に思ひをかけ、芳宜園の色なる言の葉を心に染めて、晨夕に馴睦び聞えて、古事學フルゴトガクの事ら問ひものしたるに、二人のうしたち、常にとすれば縣居の翁の世にいまそかりし折の事ども打語り聞かせられて、萬づたゞ夢のやうに覺ゆるは、など慕ひ聞えられしが、其の二人のうし達も今は世におはせずして、その語り聞かされし折の事らも、また五年十年の昔語となりにけり。おのれ才拙く、心たましひたゞはしからで、學びの常に

この御寺
品川の東海寺。

愚なれども、幸に二人の大人たちになれ親しみて、翁の昔語を聞けり。其の翁の昔語を耳に留め、二人の大人たちの世にいまそかりし晨夕を目に忘れずしあれば、翁のとありし節、二人の大人たちのかゝりしすさみを、事に觸れては思ひ出で、かつ慕ひかつ懐しむ。これ亦面白く樂しき夢物語ならずや。あはれ今この御寺に、翁のおくつき詣するも、年毎の恆例のやうになりて九十年餘り四年にもなりぬ。星移り月變らば今も亦後の世の夢物語となりなまし。今年も例の人々と共に此のおくつき詣すとて、豫めことがきを設けて、「いにし事は夢の如くなり」といふ事を、歌や言葉やと、人もよみ吾も作らんとするに、始めにいへる己が夢好みの癖思ひよそへられて、はかなきそゞろ事しも言續けられたるなりけり。

山寺のこけの筵に旅ねして

ふりしよしのぶ夢がたりせん。(卷三)

琴後集

村田春海の歌文集、十五卷ある。春海は琴後翁又は錦織齋と號し、江戸の國學者で賀茂眞淵の門人。文化八年歿、六十六歳。

上野の岡
今の東京下谷區上野公園。
池
不忍池。

三 琴後集

一 泊酒舎の記

上野の岡のふもとに池あり。この池の西なる方を葦のまちとぞいひける。こゝにあしはらかりそけてついたてたるふせやあり。そはたゞに其の池にのぞみたれば、名をさゞなみのやとなんいふなる。そもくかすみたなびく春のあしたは、むかつをの梢をうつして花のかゞみにむかひ、雁鳴きわたる秋のゆふべは、雲間のかげをうかべて月のみふねをとゞめ、あるははちすはなさく夏の日、あるはみ雪降る冬の夜をりにつけ時にしたがひて、見るめのあはれなんつきざりける。あるじはふかくみやびこのめる人にて、四つの時のあはれをすぐさず、こをいにしへさまのこの葉にのばへておもひをやり、またもろこしぶりのしらべにならひて心をも

あるじ
清水濱臣。

なぐさめけり。かれたまあへるひとく、花にあくがれ月にたどるも、つねにこのふせやをなん訪ひ來にける。一日あるじのいひけらく、世を経てたえざるものは鳥のあとなり。いで此の屋のたのしみをも、人々とあひむつばへるこゝろをも、ながくうみの子のつきく、につたへて、わが名代とせん。ことのゆゑよししるしてよ。」とあれば、すなはち筆さしぬらして、いさゝかもものゝはしにかきつく。(卷十)

二 知足庵の記

あはれ世のならばしこそはかなきものはあなれ。たかきいやしき品いとことなりといへども、おのがじゝこゝろゆくばかりなるはまれにて、たゞたらはぬ事のみぞおほかりける。花を思ふとては梢のあらしをうらみ、月をめぐるとては尾上の雲をいとふため

林にやどを云々
鶴鶴真、深林、不
過一枝、假鼠飲、
河不、過、滿腹、
(莊子)

梅の尾の昔云々
京都梅尾の明慧
上人、僧榮西か
ら茶の種を得て
梅尾に植ゑた事
からかういつた
のである。

し、誰かはのがるべき。「林に宿るさゝぎは僅なるさ枝のかげをのみたのみ、ながれに水もとむるねずみは唯渴をとむるにすぎず。」とこそ、いにしへ人もいひつれ。かゝることわりをだにわかたば、かぎりあるこの世に、かぎりなき事をおもふべきかは。こゝに中村のぬしなん、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒、松のとほそにこゝろの月をすましめ、花をつむゆふべ、あかをくむあかつき、みほとけにつかふるいとまある時は、氷をくだき雪をにて、梅の尾の昔をしのぶめる業にしも、心をなんなくさめける。これや此の世にもとむべきすぢをもわすれ、また人をうらやむべきふしをもおもはで、おのが心から事足る業にしもあれば、かのいにしへ人のいひけんことわりにこそかなはめ。いでやうつそみの世の、かぎりなきもとめあるきはとは、日をならべてあげつらふべくもあらざりけり。うべなく、このすみかをしも、たることをしるとは名

づけしこと。(卷十)

三 隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、よろづにさま／＼なれど、時にそむき折にあはて、つき／＼しからざらんは、いみじきふしなりとも、いかでこゝろのゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火のあたゝかなるを思はず。冬の夜にひみづのすゞしさをば忘れつべし。いにしへの人も、春のあじろ、八月のしらがさねをこそ、すさまじきことのためしには引きいてたりけれ。かゝればはかなきすさみも、折にあひたるはをかしく、見どころなき木草も、時を得たるはめづらかになんおぼゆる。しかはあれど、人ぐさしげきちまたの、ところせく門たちならべたらんあたりには、時をすぐし、をりを失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にうとく、水によしあるは山

いにしへの人
清少納言。枕草
紙の、すさまじ
きものといふ項
にこの事を書い
てゐる。

聞中大徳
傳不詳、琴後集
に聞中上人を送
る序がある。

はるかにて、四つの時のゆきめぐるに随ひて心をやるべきすまひは、いと／＼かたしや。こゝに前田のぬしの高どのこそ、あやしく所得てはおぼゆれ。しりへは市路につゞくものから、まへは世ばなれたるのぞみあり。春はむかつをの花のかをりを居ながらたもとにしめ、夏はみなぎは清き池のはちすばを舟ならずして手をり、秋は月にうそぶき、冬は雪にうたふも、すべてやま水のあはれをそへざるをりなんあらざりける。ましてあるじの言の葉もて友にまじらふこと廣ければ、時にふれをりをすごさず訪ひくる人、皆みやび好まざるはなし。かくとこしへにあくよもしらぬ高どのなればとて、聞中大徳のことさらに、時にしたがふてふことをもて名づけられたるは、ふかきこゝろしらひにこそありけらし。

(卷十)

こてふにも似ぬ
夜のさまなれど
月夜よし夜よし
と人に告げやら
ば来てふに似た
り待たずしもあ
らず。(古今集)

よるの錦
富貴不歸故郷
如衣錦夜行
(漢書)

四 くもる秋の月を見る記

芳宜園の月のまとるは、年ごとのちぎりなれば、こてふにも似ぬ夜のさまなれど、こよひも例の人々まうで來にけり。さるはふりくらしたる雨の名残、はれゆかん空もおぼえず、ましてさやけき光まちいでんは、いと心もとなきを、更けゆかばかくのみにあらじを、こよひはねであかしてましなどいひつゝ、いよすむなしうからげて、そのみうちまもらるゝもいとわりなしや。今宵は名におふ園生の花も、いたづらによるの錦にて、浅茅のもとの松蟲のみ、やうく聲そはりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれはそへつべし。

はれまなき月をいかにといひくゝて

そらながめにや今宵あかさむ

かきくらす雲間の影はうとくとも

月まつ蟲よせめてかたらへ (卷十)

五 雪をめづる記

かきかぞふ四つの時につけて、むらぎもの心をやるわざなん多かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪をよるこぶ、三つのならはしこそ、世にたぐひなきさみとはすめれ。ことさへぐから人のためしにも、しきしまの大和の國ぶりにも、たかきもいやしきもへだつる事なく、いにしへより今にかよはして、こを歌にによび、文にしるしてめであへるは、いづれをおとれりとも、いづれをまされりとも、品さだむべきたぐひならぬは、もとよりあげつらふべきことならねど、人によりて、おのがじゝ心の引くかたなくてやはあらん。梓弓春のあした、うらくとひもときそむる花の心をとはんには、

まづかしこの野づかさこの山里霞をしのぎ岩ほをたどりて名
 ぐはしき陰をもとめてこそたぐひなきにほひをも見るべけれ。
 おどろなる垣ほのうちあやしきふせやの前に、一木ふた木を移し
 うゑたらんはなかくに花のおもてをぞふせつべき。また眞萩
 さく秋のさかりくまなき月の光は、所をわかねど、あるは高殿の簾
 をからげて千里の空をのぞみ、あるは行く河のながれにうかびて
 水底の影をもてあそびてこそ心の雲もはるくべけれ。小家し
 みに立ちならび、はたばりなきはひりの庭に、うづくまりてみん
 には塵あくたけがしさも、澄みわたる光にいよゝあらはれ行きて、
 かへりては月うとかれとぞおぼゆめれ。かゝれば月と花とは、所
 がらこそあはれもうちそはるめれ。さるはかたる翁がたぐひの
 しづたまき品賤くして、うつゆふのさく苦しきすみかにかきこも
 り居つゝ、くさつゝみやもひにのみかゝづらふ身は、かの高殿の望

舟やかたのすさみはいかてかおもひもかけん。文野山の遊も、お
 のづから時におくれをりを過して、常に心にそむくふしなんおほ
 かめる。かれ雪ばかりは、此の二つにことなり、むぐらにとぢたる
 門のうちも、たゞ一夜のからに玉しく庭とうつろひ、あばらなる板
 屋が軒も、時の間に白がねをはやせるばかりに、すがたをかへもて
 行きて、あしたゆふべのいぶせさもさらにおほえず。まためなれ
 たる市のちまたも、たちまちに景色をそへて、いひしらぬ山里のお
 もひをなし、ゆきかふあき人の蓑笠までも見所ありと覺え、はかな
 き木草、よろづのものも、さながらめづらかなりとのみめとゞめら
 るゝ。たゞ居ながらにして境をうつし、所をかゝるやいふべか
 らん。かくてこそ心にたらはぬことなく、ほかに羨むべきふしも
 あらね。されば此の雪にのみ翁が心をよするも、所にしたがひ人
 によりたる、老のすさみなるはや。(卷十)

上田秋成

次に探録した雨月物語の著者。奇人で屢々住處を變へた一の號を鶉居とつけ、自ら之を説明して、鶉は常居なしの意をとつたものだといつてゐる。嘗て攝津の長柄に住み家で京都に移つた。此の手紙はその時のものであらう。

市のうちに隠れけん古人
小隠隱 陵 藪 大
隱隱 朝市 (康
現)

六 上田秋成がもとへ

春たちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。今はいはほの中なるすまひをふりすて給ひて、巷の花柳にたちまぢらひ給ふらんは、いかに心ゆく御すみかならまし。

すごもれる谷の鶯いかなれば

都のはるに心ひかれし

となん聞えまほしき。されどうき世の塵ののがれがたかなるも、猶市のうちに隠れけん、古人のためしにならひ給ふべければ、世のさがしらぬ人々とのみ、みやびかはし給ふらんは、山住のつれづれならんよりはと、おし計りまゐらすものから、いたづらに千里のよそにありて、萬づまのあたり聞え承らぬこそあかぬわざなれ。さはいへ、雁の翅の行きかひだに絶えずば、中々に遠くて近きたぐ

稚櫻の宮
履仲天皇の皇
居。

朝倉の宮

雄略天皇の皇
居。

藤原の御世

持統天皇の御
代。

奈良の御世

元明天皇から光
仁天皇まで七
代。

物おもひなき春
を云々
年ふれば齡は老
いぬしかはあれ
ど花をし見れば
物思ひもなし。
(古今集)

ひとや思ひなぐさみ侍らん。柳の絲のくりかへしつゝ、今年もとだえなく聞えまゐらせばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音をしみたまひそ。(卷十三)

七 月花のあはれをことわる詞

花をめぐらしみ月をあはれむならはしなん、流れての世はさらなる。其のみなもとを考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起りにける。花に心を慰めませしは、稚櫻の宮にはじまり、月を言の葉にかけ給へるは、朝倉の宮よりなん聞えたる。しかありて後、藤原奈良の御世にいたりては、歌人おほくいで來て、かたみにみやびをかはし、ころく、に思ひをのぶる事、皆月花をもて心の種とぞなしたりける。かくて世のうつるにしたがひて、此のすさみいよゝさかりになりもてゆきて、あるは物おもひなき春を花によるこび、加はる

加はる老を云々
大方は月をもめ
てこれぞこの
つもれば人の老
となるもの。古
今集

花の命を云々

櫻町中納言藤原
成範が祈の早く
散るを惜んで天
照大神に咲きの
びる事を祈つた
といふ故事。

月のゆくへを云
云

月かげは入る山
の端もつらかり
き絶えぬ光を見
るよしもかな。
(新勅撰集)

老を月になげき、あるはさかしきもおろかなるも、たよりなき所にはなをたづね、しるべなきやみに月をたどり、あるは花の命を神にいのり、月のゆくへを佛にちぎり、またしもがしもなる薪こる山がつ、いぶせきふせやのしづのめまでも、月と花とに心をよせざるなんあらざりけらし。さるはかけまくもかしこきおほみあそびのきはことなるが中にも、月と花とのためには、時にのぞみて、ことさららうたげのむしろをまうけ給ふ事おきてたがはず、のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさまん、なるよのあをを見るに、いにしへも今も尊きもみじかきも、月と花とをうむかしみおもへる事ひとしくて、いづれをあまれりとし、いづれをたらずとして、一かたにこゝろよせたる人たれかはあらん。しかるを今にありて、其のよしあしをことわりいはんは、人わらへにもなりぬべし。しかはあれど、これをことわるにゆゑあり。そのおとり

まさりは、もとよりかれにはあらざめれど、おのがじ、うち見る人の身にたぐへおもはんには、其のよるかたいかでかならん。抑も花は春にありてにぎは、しきにより、月は秋にありてかなしみをぞ起すなる。今このくち翁が心にとりていは、身すでに老にたれば、つぼめる花のさかりまちいでんたのしみもなく、品いやしければ、花々しき世をへて時にかをらんねがひもかけず、たゞ鏡にうちむかふをりしも、かしらの霜をみては月の影かとおどろき、かたぶくよはひをおもひては、入かたの月ぞ身によそへつべき、かれば花にはおのづからうとく、月にぞ心のひかれける。さはいへ、こはわが身ひとつのすさみなり、おほよそ人のためには、いかてかまねびもいでん。(卷十四)

四 雨月物語

一 夢應の鯉魚

昔延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて、名を世に許されけり。常に畫く所、佛像、山水、花鳥を事とせず。寺務のいとまある日は、湖に小船を浮べて、網引釣するあまに、錢を與へ、獲たる魚をもとの江に放ちて、其の魚の遊ぶを見ては、畫きける程に、年を経て精しきに至りけり。或時は繪に心を凝して、眠を誘へば、夢の裏に江に入りて、大小の魚と共に遊ぶ。覺むれば、やがて見つける儘を畫きて、壁におし、自ら呼びて、夢應の鯉魚と名付けけり。その繪の妙なるをめでて、乞要むる者前後を争へば、只、花鳥、山水は乞ふに任せて與へ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人ごとに戯れていふ、「生を殺し、鮮を喰ふ、凡俗の人に、法師の養ふ魚必ずしも與

雨月物語

上田秋成の著、怪異なる短篇小説數篇を集めたもの。秋成は大阪の人で、後に京都に住む。國文學に關する著書の外に小説、隨筆等がある。文化六年没、七十八歳。
 延長 醍醐天皇の時の年號。
 三井寺 圓城寺のこと。大津町の西北にある。

へず。」となん。其の繪と俳諧と、共に天下に聞えけり。一年病に罹りて七日を経て、忽に眼を閉ぢ、息絶えて空しくなりぬ。徒弟、友どち集りて、歎き惜みけるが、只胸のあたりの少し暖なるにぞ、もしやと居めぐりて守りつも、三日を經にけるに、手足すこし動き出づるやうなりしが、忽ち溜息を吐きて、眼をひらき、醒めたるが如くに起きあがりて、人々にむかひ、「我、人事をわすれて、既に久しき日をか過しけん。」衆弟等いふ、「師、三日前に息たえ給ひぬ。寺中の人々をはじめ、日頃睦じくかたり給ふ殿ばらも、詣でたまひて、葬の事をも計りたまひぬれど、只師が胸の暖なるを見て、柩にも藏めてかく守り侍りしに、今や蘇生りたまふにつきて、かしこくも物せざりしよと、怡びあへり。」興義點頭きていふ、「誰にもあれ、一人檀家の平の助の殿の館に詣りて、申さんは、法師こそ不思議に、生きはべれ。君今酒を酌み、鮮けき繪をつくらしめたまふ。しばらく宴を罷め

て寺に詣てさせたまへ。稀有の物語聞えまゐらせん。』とて彼の人々のある形を見よ。我が詞に露たがはじ。』といふ。使異みながら彼の館に往きて其の由をいひ入れてうかゞひ見るに、主の助を初め、弟の十郎、家の子、掃守カモリなど居めぐりて酒を酌みたる、師が詞のたがはぬを奇とす。彼の館の人々此のことを聞きて大に異み、先づ箸を止めて十郎、掃守をも召具して寺に到る。興義枕をあげて、路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生コソキの賀を述べ。興義先づ問うていふ、君試に我がいふ事を聞かせたまへ。かの漁父文四に魚をあつらへ給ふことありや。』助驚きて、まことにさることあり。いかにしてしらせたまふや。』興義かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の所に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて桃の實の大なるを啗ひつゝ、突の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高坏に盛りた

る桃をあたへ、又杯をたまうて三獻飲ましめたまふ。鱧手カシイしたり顔に魚をとり出でて鱧にせしまで、法師がいふ所たがはてこそあるらめ。』と云ふに、助の人々此の事を聞きて、或は異み或はこゝち惑ひて、かくつばらなる言のよしを頻にたづぬるに、興義かたりていふ、我此の頃病に苦しみて堪へがたきあまり、其の死したるをもしらず、熱きこゝちすこし冷さんものと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井にかへるこゝちす。山となく里となく、行き行きて又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に、浴びて遊びなんとて、そこに衣を脱ぎすて、身を跳らして深きに飛入りつゝも、をちこちに遊びめぐるに幼きより水に狎れたるにもあらぬが、思ふにまかせて戯れけり。今思へば愚なる夢ごころなりし。されども人の水に浮ぶは、魚のこゝろよきにはしかず。こゝにて又魚の遊を羨むこゝろおこりぬ。傍

長等の山
 近江國滋賀郡。
 三井寺の西方に
 そびえる山。
 志賀の大曲
 同郡にある入
 江。又輪田とも
 いふ。滋賀の都
 の時の渡津であ
 る。

にひとつの大魚ありていふ。『師のねがふ事いとやすし。待たせ
 たまへ。』とてはるかの底にゆくと見しに、しばしして冠裝束した
 る人の、前の大魚に跨りて許多のうろくづを率ゐて浮びきたり、我
 にむかひていふ、『わたつみの詔あり。老僧かねて放生の功德多
 し。今江に入りて魚のあそびをねがふ。權に金鯉が服を授けて、
 水府のたのしみをせさせ給ふ。古餌の香しきに味まされて、釣の
 絲にかゝり身を亡ふことなかれ。』といひて去りて見えなくなりぬ。
 不思議のあまりに、おのが身をかへり見れば、いつのまにか鱗金光
 を備へてひとつの鯉魚と化しぬ。あやしとも思はて、尾を振り鱗
 を動かして心のまゝに逍遙す。まづ長等の山おろし、立ちゐる浪
 に身をのせて、志賀の大曲の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらす
 ゆきかひに驚かされて、比良の高山影うつる深き水底に潜くとす
 れど、かくれ堅田の漁火によるぞうつなき。ぬば玉の夜中の瀉

比良の高山
 同郡に屬し、木
 戸・小松二村の
 西に横ばる。
 堅田
 琵琶湖の西岸に
 ある。
 夜中の瀉
 近江高島郡にあ
 ったものらし
 い。萬葉集の歌
 に見えてゐる。
 鏡の山
 蒲生郡にある
 山。三上山の西
 にならぶ。
 沖津島山
 琵琶湖中にある
 沖之島。島中に
 奥津島神社があ
 る。
 竹生島
 琵琶湖中の有名
 な島。都久夫須
 磨神社がある。

にやどる月は、鏡の山の峰に清みて、八十の湊の八十隈もなくてお
 もしろ。沖津島山、竹生島、波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ。
 さしも伊吹の山風に朝妻船も漕出づれば、葦間の夢さまされ、矢橋
 の渡する人の水なれ棹をのがれては、勢田の橋守にいくそたびか
 追はれぬ。日あたゝかなれば浮び、風あらしときは千尋の底に遊
 ぶ。急にも飢えて食ほしげなるに、をちこちにあさり得ずして狂
 ひゆくほどに、忽ち文四が釣を垂るゝにあふ。その餌はなはだ香
 し。心又わたつみの戒を守りて思ふ。我は佛の御弟子なり。し
 ばし食を求め得ずとも、なぞもあさましく魚の餌を飲むべきとて
 其所を去る。しばしありて飢ますゝ甚しければ、かさねて思ふ
 に、今は堪へがたし。たとひ此の餌を飲むとも、をこに捕られんや
 は。もとより彼は相識るものなれば、何のはかりかあらんとて、
 遂に餌をのむ。文四早く絲を収めて我を捕ふ。こはいかにする

伊吹山
近江國坂田郡に在る山。
おぼつかない伊吹おろしの風さきにあさづま舟のあひやしぬらん。(山家集)

矢橋
近江國栗太郡にある村。瀬田村の北一里。

勢田の橋守
琵琶湖の水が勢田川となつて流れ出る處に勢田橋が架けてある。有名な勢田の唐橋はこれである。

ぞと叫びぬれども、彼かつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我が腮を貫き、葦間に船を繋ぎ、我を籠に押入れて君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に突して遊ばせたまふ。掃守傍に侍りて、菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大に感てさせたまふ。我其のとき人々にむかひ、聲をはり上げて、『かたゝゝ等は興義をわすれたまふか。宥させたまへ。寺にかへさせたまへ。』としきりに叫びぬれど、人々しらぬさまにもてなして、只手を拍つて喜びたまふ。鱧手なるもの、まづ我が兩眼を左手の指にてつよくとらへ、右手に礪ぎすませし刀をとりて、俎盤ヌイタにのぼし、既に切るべかりしとき、我くるしさのあまりに大聲をあげて、『佛弟子を害する例やある。我を助けよ、助けよ。』となき叫びぬれど、聞入れず。終に切らるゝとおぼえて夢醒めたり。』とかたる。

人々大いに感てあやしみ、『師が物がたりにつきて思ふに、其の度

閑院の殿
京都二條の南、西洞院の西に一町四方の地を占めた邸。初め藤原冬嗣の邸として作られたが、後には皇居となつた事もある。

古き物がたり
古今著聞集。

ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出す事なし。かゝる事まのあたりに見しこそいと不思議なれ。』とて従者を家に走らしめて、残れる鱧を湖に捨てさせけり。

興義これより病癒えて、はるかの後天年をもてまかりける。其の終焉ヲハリに臨みて、晝く所の鯉魚數枚をとりて湖に散らせば、晝ける魚紙繭をはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず、その弟子成光ナリヒなるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院の殿の障子に鶏を晝きしに、生ける鶏この繪を見て、蹴たるよしを、古き物がたりに載せたり。(卷二)

二 菊花の約

播磨の國加古の驛に、丈部左門といふ博士あり。清貧をあまなひて、友とする書の外はすべて調度の煩しきを厭ふ。老母あり。孟

氏の操に譲らず。常に紡績を事として、左門がこゝろざしを助く其妹なるものは、同じ里の佐用氏に養はる。此佐用が家は頗富み榮えて有りけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢々事に托せて物を贈るといへども、口腹の爲に人を累さんや」とて、敢へて承くることなし。一日左門同じ里の何某が許に訪ひて、いにしへ今の物語して、興ある時に、壁を隔て、人の苦しむ聲、いとも哀れに聞えければ、主に尋ねるに、主答ふ。「これより西の國の人と見ゆるが、伴ひに後れしよしにて一宿を求めらるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、留め參らせしに、其夜邪熱劇しく、起臥も自はまかせられぬをいとほしさに、三日四日を過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひがけぬ過し出でて、心地惑ひ侍りぬ」といふ。左門聞きて、「悲しき物語にこそ。主の心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人は、しるべなき旅の空に、此疾を

瘧病
流行の熱病。疫

憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。其やうをも看ばや」といふを、主とゞめて、「瘧病は人を過つ物と聞ゆるから、童部らもあへてかしこに行かしめず。立ちよりて身を害し給ふこと勿れ。左門笑うていふ。「死生命あり。何の病か人に傳ふべき、これらは愚俗のことばにて吾們はとらず」とて、戸を推して入りつゝも、其人を見るに、主が語りしに違はで、並の人にはあらじを、病深きと見えて、面は黄に、肌黒く瘦せ、古き衾のうへに悶え臥す。人なつかしげに左門を見て、「湯一つ恵み給へ」といふ。左門近くよりて、「士憂ひ給ふこと勿れ、必救ひ參らすべし」とて、主と計りて、薬をえらみ、自ら方を案じ、みづから煮て與へつゝも、猶粥をすゝめて病を看ること、同胞の如く、實に捨て難き有様なり。かの武士、左門が愛憐の厚きに涙を流して、「かくまで漂客を恵み給ふ、死すとも御心に報い奉らん」といふ。左門諫めて、「力なきことは、な聞えたまひそ。凡疫は日數あり、其程を

富田 出雲能義郡。
 鹽冶掃部介 京極持清に屬し、三澤三刀屋の諸族と尼子清定の居城富田城を攻陥れ、代はつて其の城主となる。
 佐々木氏綱 高頼の子。近江の守。
 尼子經久 清定の子。文明十八年富田城を奪還し出雲因幡伯耆隱岐等を略有し天文十年八十四歿す。
 山中黨 出雲の豪族。
 三澤、三刀屋 出雲の豪族。三澤は三澤城主爲幸、三刀屋は彈正左衛門爲虎。

すぎぬれば壽命をあやまたず。吾日々に詣でて仕へ參らすべし」と實やかに約りつゝも、心を用ひて助けゝるに、病漸減じて心地清しく覺えければ、主にも懇に詞をつくし、左門が陰徳を尊とみて、其生業をもたづね、己が身の上をも語りていふ。「故出雲の國松江の郷に生長りて、赤穴宗右衛門といふ者なるが纔に兵書の旨を明らかめしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師として物學び給ひしに、近江の佐々木氏綱に密の使に選ばれて、かの館に留まるうち前の城主尼子經久、山中黨をかたらひて、大晦日の夜に城を乗りとりしかば掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて鹽冶は守護代なれば、三澤、三刀屋を助けて、經久を亡し給へと勸むれども、氏綱は外勇にして内怯えたる愚將なれば果さず、却て吾を國に留む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて國に還る路に、此疾に罹りて、思懸ずも師を煩しむるは、身に餘りたる

御恩にこそ。吾半世の命をもて、必報い奉らん。」左門いふ。「見る所を忍びざるは、人たるものゝ心なるべければ、厚き詞を納むるに故なし。猶留りていたはり給へ」と、實ある詞を便にて、日頃經るままに物みな平生に近くぞなりにける。此日頃左門は、よき友求めたりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子百家のことおろ／＼語り出でて、問ひわきまふる心愚ならず。兵機のことわりをささしく聞えければ、一つとして相共に違ふ心もなく、かつめで、かつ喜びて、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、兄たるべき禮儀ををさめて、左門に向ひていふ。「吾父母に別れ參らせていとも久し。賢弟が老母は即て吾母なれば、あらたに拜み奉らんことを願ふ。老母憐みてをさなき心を受け給はんや。」左門歡に堪へず。「母なる者常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば、齡も延びなんに」と伴ひて家に歸る。老母喜び迎へて、「吾子不才にて學ぶ所時

にあはず、青雲の便を失ふ。願ふは捨ずして兄たる教を施し給へ。赤穴拜していふ。「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾いま母公の慈愛を蒙り、賢弟の敬を納むる、何の望かこれに過ぐべき」と喜びうれしみつゝ、又日來をとゞまりける。きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散りはて、涼しき風による浪に、とはでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向ひて、「吾近江を遁れ來りしも、雲州の様子を見ん爲なれば、一たび下りて、やがて歸り來り、菽水の奴に御恩をかへし奉るべし。今の別れを給へ」といふ。左門いふ。「さあらばこのかみいつの時にか歸り給ふべき。」赤穴いふ。「月日は逝きやすし。おそくとも此秋は過さじ。」左門いふ。「秋はいつの日を定めて待つべきか。願ふは約し給へ。」赤穴いふ。「重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。」左門いふ。「このかみ必ず此日を誤りたまふな。一枝の菊花に薄き酒を備へ

て待ち奉らん」と互に情をつくして赤穴は西に歸りけり。新玉の月日早く經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶やかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起き出でて、草の屋の席をはらひ、黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊を傾けて酒飯の設をす。老母いふ。「かの八雲たつ國は山陰のはてにありて、こゝには百里を隔つるときけば、けふとも定め難きに、其來しを見ても物すとも遅からじ。」左門いふ。「赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其人を見てあわたしからんは、思はんことの恥し」とて、美酒を沽ひ、鮮らけき魚を煮て厨に備ふ。此日や天晴れて、千里に雲の立居もなく、草枕旅ゆく人の群々語りゆくは、けふは誰某がよき京入なる。此度の商物によき徳とるべき祥になん」とて過ぐ。五十あまりの武士、二十あまりの同じ出立なる。日和はかばかりよかりしものを。明石より船もとめなば、こ

牛窓 備前國邑久郡牛窓の港。
 小豆島 讃岐にあり。瀬戸内海中の一小島。
 室津 播摩國揖生郡。魚の橋 播摩國印南郡阿彌陀村。

の朝びらきに、牛窓の門の泊は追ふべき。若き男は却物怯して、錢おほく費すことよといふに、殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津のわたりし給ふに、なまからきめにあはせ給ふを、從に侍りしものゝ語りしを思へば、このほとりの渡は、必ず怯ゆべし。な、悲みたまひそ。魚が橋の蕎麥振舞申さんに「といひ慰めて行く。口とる男の腹だたしげに、此死馬は眼をもはたけぬか」と、荷鞍おし直して追ひもて行く。午後もやゝ傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて心酔へるが如し。老母左門をよびて、人の心の秋には非ずとも、菊の色こきはけふのみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨に移行くとも、何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌の日を待つべし」とあるに、否みがたく、母をすかして前に臥さしめ、もしやと戸の外に出て見れば、銀河影消え、に、水輪我のみを照して淋

井臼の力 水を汲み米を舂く努力。

しきに、軒守る犬の吼ゆる聲澄渡り、浦波の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてて入らんとするに、たゞ見るおぼろなる黑影の中に人ありて、風のまに、來るを怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。踊り上る心地して、「小弟蚤くより待ちて今に至りぬる。盟たがはて來り給ふことのうれしさよ。いざ入らせたまへ」といへど、只點頭きて物をもいはである。左門前に進みて、南の窓の下に迎へ、座につかしめ、「このかみ來り給ふことの遅かりしに、老母も待ちわびて翌こそと臥所に入らせたまふ。寤させ參らせん」といへるを、赤穴又頭を振りて止めつゝも、更に物をもいはでぞある。左門いふ。「既に夜を續ぎて來し給ふに、心も倦み足も勞れ給ふべし。幸に一杯を酌みて休ませ給へ」とて、酒をあたまめ、下物を列ねて勤むるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其臭を嫌み避くるに似たり。左門いふ。井臼の力はたも

てなすに足らざれども、己が心なり。卑しみ給ふ事勿れ、赤穴猶答へもせて、長き息をつきつゝ、暫ししていふ。「賢弟が信あるあるじぶりを、などいなむべきことわりやあらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必しも怪しみ給ひそ。吾は陽世ウツセの人にあらず、きたなき靈のかりに形を見えつるなり。」左門大いに驚きて、「このかみ、何故にこの怪しきを語り出で給ふや。更に夢とも覺え侍らず。」赤穴いふ。「賢弟と別れて國に下りしが、國人大方經久が勢に服きて、鹽冶の恩を顧みる者なし。從弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪ひしに、利害を説きて吾を經久に見えしむ。假に其詞を容れて、つらく、經久がなす所を見るに、萬夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練すといへども、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。ながく居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に

令し、吾を大城オホギの外に放たずして、遂に今日に至らしむ。此約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。昔の人のいふ。人一日に千里をゆくこと能はず。魂よく一日に千里をもゆくと、此理を思出でて自ら又またに伏し今夜陰風に乗りてはるゝ、來り菊花の約につく。此心を憐み給へ」と言終はりて、泪わき出づるが如し。「今は永き別なり。只母公に事へ給へ」とて、座を立つと見しが、かき消えて見えずなりにける。左門あはてとゞめんとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらす俯伏につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大に哭く。老母目さめ、驚き立て、左門がある所を見れば、座上に酒瓶魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に臥倒れたるを、忙はしく扶け起して、いかにとへども、只聲を吞みて泣くゝ、さらに言なし。老母問うていふ「兄赤穴が約にたがふをうらむとならば、明日なんもし來るには言

なからんものを、汝かくまでをさなくも愚なるか」と、強く諫むるに左門稍答へていふ。「このかみ今夜菊花の約にわざん、来る。酒肴をもて迎ふるに、再三辭み給うていふ。しかん、のやうにて約に背くが故に、自ら又に伏して、亡魂百里を來るといひて見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚し奉れ。只々赦し給へ」と潜然と哭入るを、老母いふ。「牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渴するものは夢に漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらん。よく心を靜むべし」とあれども、左門頭を揺りて、實に夢の正なきにあらず。このかみはこゝもとにこそありつれ」と、又聲を擧げて哭倒る。老母も今は疑はず、相叫びて其夜は哭きあかしぬ。明くる日左門母を拜していふ。「吾幼きより身を翰墨に寄するといへども、國に忠義の聞なく、家に孝信を盡すこと能はず。徒に天地の間に生るゝのみ。このかみ赤穴は一生を信義のために終る。

小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。きみ御身を保ち給うて、暫くの暇を給ふべし。」老母いふ。「吾兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く留りてけふを久しき日となすこと勿れ。」左門いふ。「生は浮きたる漚の如く、朝夕に定め難くとも、やがて歸り參るべし」とて涙を振うて家を出て、佐用氏にゆきて、老母の介抱を懇にあつらへ、出雲の國にまゐる路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れて、まどろめば夢にも哭き明しつゝ、十日をへて富田の大城に到りぬ。先赤穴丹治が宅にゆきて、姓名をもていひ入るに、丹治迎へ請じて、「翼ある物の告ぐるにあらで、いかにしらせ給ふべき。謂なし」と頻に問ひもとむ。左門いふ。「士たる者は富貴消息の事、共に論ずべからず。只信義をもて重しとす。兄宗右衛門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來るに報いすとして、日夜を追うてこゝに下りしなり。わが學ぶ所につ

公叔座
支那、戰國時代、
 魏の惠王の時の
 相。
 商鞅
衛の人。魏の公
 叔座に仕へた。
 座が死んで秦に
 仕へ大に用られ
 たが後讒にあう
 て死んだ。

いて士に尋ね参らすべき旨あり。願ふは明かに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀にふしたるに、魏王自まうてて、手をとつも告ぐるは「若し諱むべからずの事あらば、誰をして社稷を守らしめんや。わがために教をのこせ」とあるに、叔座いふ。「商鞅年少しといへども奇才あり、王もしこの人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すこと勿れ、他の國にゆかしめば、必ずも後の禍となるべし」と懇に教へて、又商鞅を私に招き「吾汝を勸むれども王許さざる色あれば、用ひずばかへりて汝を害し給へと教ふ。是れ君を先にし臣を後にするなり。汝速く他の國に去りて害を免るべし」といへり。この事士と宗右衛門にたぐへてはいかに。「丹治只頭を低れて言なし。左門座を進みて、兄宗右衛門鹽冶が舊交を思ひて、尼子に仕へざるは義士なり。士は舊主の鹽冶を捨て、尼子に降りしは士たる義なし。兄は菊花の約を重んじ、命を捨て、百里を來し

は信ある極なり。士は今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、此横死をなさしむるは友とする信なし。經久強ひて留め給ふとも、舊しき交を思はず、私に商鞅叔座が信を盡すべきに、只榮利にのみ走りて、士家の風なきは即尼子の家風なるべし。さるから、このかみ何故この國に足を留むべき、吾今信義を重んじて、態々こゝに來る。汝は又不義のために汚名を遺せとて、いひも終らず拔打に切りつくれば、一刀にてそこに倒る。家子ども立騒ぐ間にはやく逃れ出でて跡なし。尼子經久この由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐れみ、左門が跡をも強ひて追はせざるとなり。

玉かつま

本居宣長の隨筆、十四卷ある。宣長は伊勢松坂の人、國學四大人の一、賀茂真淵の門人。享和元年歿、七十二歳。

古今集

勅撰集の初集。醍醐天皇が紀貫之等に命じて撰ばせ給うたもの。

萬葉集

我が國最古の歌集。上代から奈良へかけての歌が集めてある。

五 玉かつま

一 縣居のうしは古學のおやなる事

からごゝろを清くはなれて、もはら古のこゝろ詞をたづぬる學問はわが縣居の大人よりぞはじまりける。この大人の學のいまだおこらざりしほどの世の學問は、歌もたゞ古今集よりこなたにのみとゞまりて、萬葉などは、たゞいと物どほく心も及ばぬ物として、さらにその歌のよきあしきを思ひ、ふるきちかきをわきまへ、又その詞を今のおのが物としてつかふ事などは、すべて思ひも及ばざりしことなるを、今はその古言をおのがものとして、萬葉ぶりの歌をもよみいで、古ぶりの文などをさへかきうることゝなれるは、もはら、此のうしのをしへのいさをにぞ有りける。今の人は、たゞおのれみづから得たると思ふめれど、みな此の大人の御蔭カゲによら

古事記

我が國古代の神話及び歴史の書。元明天皇の和銅四年に太安麿が、舍人神田阿禮の口誦によつて撰したるもの。

書紀

日本書紀のこと。神代から持統天皇に至るまでの歴史。元正天皇養老四年舍人親王・太安麿等が勅を奉じて撰述したるもの。

ずといふことなし。又古事記書紀などの古のみふみをうかゞふにも、漢意カラゴロミにまどはされず、まづもはら古言イニシヘゴトを明らかめ、古意イニシヘゴロによるべきことを、人みなしれるも、このうしの萬葉のをしへのみたまにぞありける。そも、かゝるたふとき道をひらきそめられたるいそしみは、よにいみじきものなりかし。(卷二)

二 古書どものこと

めづらしき書をえたらんには、したしきもうときも同じこゝろにしならん人には、かたみにやすく借して見せもし、寫させもして、世にひろくせまほしきわざなるを、人には見せず、己ひとり見てほこらんとするは、いと、心ぎたなく、物學ぶ人のあるまじきことなり。たゞし、えがたきふみを遠くたよりあしき國などへかしやりたるに、あるは道のほどにてはふれうせ、あるは其の人にはかにな

くなりなどもして、つひにその書かへらずなる事あるは、いと心うきわざなり。されば遠きさかひよりかりたらんふみは、道のほどのことをもよくしたゝめ、又人の命は、にはかなることともはかりがたき物にしあれば、なからん後にもはふらさず、たしかにかへすべくおきておくべきわざなり。すべて人の書をかりたらんには、すみやかに見てかへすべきわざなるを、久しくとどめおくは心なし。さるは書のみにもあらず、人にかりたる物は、何もく同じことなるうちに、いかなればにか、書はことに用なくなりて後も、なほざりに打捨ておきて、久しく返さぬ人の上に多き物ぞかし。(卷二)

三 學 問

世の中に學問といふは、からぶみまなびの事にて皇國の古をまなぶをば、分けて神學、倭學、國學などいふなるは、例のから國をむねと

して、御國をかたはらになせるいひざまにて、いとくあるまじきことなれども、古へはたゞから書學びのみこそありけれ。御國の學びとては、もはらとする者はなかりしかば、おのづから然かいひならふべき勢なり。しかはあれども、近き世となりては皇國のを、もはらとするともがらもおほかれれば、からぶみ學びをば分けて漢學、儒學といひて、此の皇國のをこそうけはりて、たゞに學問とはいふべきなれ。佛學なども、他よりは分けて佛學といへども、法師のともは、それをなんたゞに學問とはいひて、佛學とはいはざる、これ然るべきことわりなり。國學といへば、尊ぶかたにもとりなさるべけれど、國の字も事にこそよれ、なほうけばらぬいひざまなり。世の人の物いひざま、すべてかゝる詞に内外のわきまへをしらず、外國を内になしたる言のみ常に多かるは、からぶみのみよみなれたるからの、ひがことなりかし。(卷二)

四 あらたなる説を出す事

ちかき世、學問の道ひらけて、大かた萬づのとりまかなひさとくか
しこくなりぬるから、とりくにあらたなる説を出す人おほく、其
の説よろしければ世にもてはやさるゝによりて、なべての學者い
まだよくもとゝのはぬほどより、われおとらじと、よにことなるめ
づらしき説を出して、人の耳をおどろかすこと今のよのならひな
り。其の中には、ずるぶんによろしきこともまれにはいてくめれ
ど、大かたいまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、たゞ人
にまさらん勝たんの心にて、かろく、しくまへしりへをも考へ合
さず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなかくなるいみ
じきひがごとのみなり。すべて新たなる説を出すは、いと大事な
り。いくたびもかへさひおもひて、よくたしかなるよりどころを

とらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふ所なくうごくまじきに
あらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけはり
てよしと思ふも、ほどへて後にいま一たびよく思へば、なほわろか
りけりと我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。(卷二)

五 からうたのよみざま

童蒙抄に「ある人北野にまうて、『東行西行雲眇々、二月三日日遅々』
といふ詩を詠じけるに、少しまどろみたる夢に」とさまにゆきかう
さまにゆきて雲はるく、きさらぎやよひ日うら／＼とこそ詠ず
れ。」と仰せられけり云々」とあり。昔は詩をもうるはしくは、か
くさまにこそよみあげけめ。詠むるはさらなり。いにしへはす
べてからぶみをよむにも、よまるゝ限りは皇國言（クニコト）によめるは、字音（モトゴト）
は聞きにくかりしが故なり。然るを今はかへさまになりて、なべ

北野 天満宮のこと。
花月草紙の二二
に註した。
東行西行云々
菅原道眞の讀
樂天北廳三友
詩と題する詩
の中の句。この
詩は菅家後集に
ある。

ての詞も皇國言よりは字音なるをうるはしきことにし、書よむにもよまるゝ限りは字音によむをよき事とすなるは、からぶみまなびの爲には字音によむかた宜しき故もあればぞかし。(卷二)

六 大神宮の茅葺なる説

伊勢の大御神の宮殿の茅葺なるを、後世に質素を示す戒なりと近き世の神道者といふ者などのいふなるは、例の漢意に諂ひたるうるさき僻事なり。質素を尊むべきも事にこそはよれ。すべて神の御事に質素をよきにする事さらになし。御殿のみならず、獻る物なども何も、力のたへたらんかぎりうるはしく嚴めしくめてたくするこそ、神を敬ひ奉るにはあれ。みあらか又獻り物などを質素にするは、禮なく心ざし浅きしわざなり。抑、伊勢の大宮の御殿の茅ぶきなるは、上つ代のよそひを重みし守りて變へ給はざる物

なり。然して茅葺ながらに、その嚴しきことの世にたぐひなきは、皇御孫命の大御神を厚く尊み敬ひ奉り給ふが故なり。さるを御自らの宮殿をば麗しく物し給ひて、大御神の宮殿をしも質素にし給ふべきよしあらめやは。すべて近き世に神道者のいふ事は、皆からごゝろにして、古の意にそむけりと知るべし。(卷二)

七 頼朝卿靜をめてして舞はせられし事

文治二年四月八日、二品並に御臺所、鶴岡宮に參り給ふ序に、靜女を廻廊に召出でて舞曲を施せしめ給ふ。去ぬる頃より度々仰せらると雖も、固く辭み申せり。今日座に臨みても猶辭み申しけるを、貴命再三に及びければ仰せに従ひて舞曲せり。左衛門尉祐經鼓をうち、高山次郎重忠銅拍子たり。靜まづ歌を吟出して曰く、
よし野山峰の白雪ふみ分けて

文治二年
紀元千八百四十六年。
二品
源頼朝。
御臺所
鶴岡宮
鎌倉鶴岡八幡宮。
左衛門尉祐經
工藤祐經。

入りにし人の跡ぞ戀しき

次に別物曲をうたひて後、又和歌を吟じていはく、

しづやしづしづのをだまきくりかへし

むかしをいまになすよしもがな

二品仰せにいはく、尤も關東の萬歳を祝すべき所に、聞召す所を憚らず、反逆の義經を慕ひ、別曲ワカレンキョクをうたふ事奇怪なり。」とて御氣しきあしかりしに、御臺所は貞烈の心ばせを感じ給ふによりて、二品も御けしき直りにけり。暫しありて簾中より卯花重の御衣をおし出して纏頭せられけり。この事は東鑑に見えたり。(卷二)

八 ふみよむことのたとへ

須賀直見がいひしは、廣く大きな書をよむは、長き旅路をゆくが如し。おもしろからぬ所もおほかるを、經行きては又おもしろく

須賀直見

宣長の高弟、宣長と同郷で松坂の人であつた。安永五年歿。

めさむるこゝちする浦山にもいたるなり、又あしつよき人ははやく、よわきはゆくことおそきも、よく似たりとぞいひける。をかしかたとへなりかし。(卷二)

九 あらたにいひ出でたる説

大かたよのつねにことなる新しき説をおこすときには、よきあしきをいはず、まづ一わたりは世の中の學者にくまれせしらるゝものなり。あるは己がもとより來つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるにすてゝとりあげざる者もあり。あるは心のうちには、げにと思ふふしもおほくある物から、さすがに近き人のことにしたかはんととのねたくて、よしともあしともいはて、たゞうけぬかほして過すたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひ

玉かつま

八 ふみよむことのたとへ

九 あらたにいひ出でたる説

九五

ながら、其の中の疵をあなたがちにもとめ出でて、すべてをいひけたんとかまふる者も有り。大かたふるき説をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、わづかに、二つ三つのとるべき所のあるをとりたて、力のかぎりたすけ用ひんとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つのわるきことをいひたてて、八つ九つよきことをもおしけちて、ちからのかぎりは我も用ひず人にももちひさせじとする、こは大かたの學者のならひなり。然れども又まれ／＼には、新なる説のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、すみやかに改めしたがふたぐひもなきにはあらず。ふるきをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながらさてあるなどは、あらたなるよき説をきゝては、かくてこそはといみじくよろこびつゝ、たちまちにしたがふたぐひも有りかし。大かた新なる説は、

いかによくてもすみやかに用ふる人まれなるものなれど、よきは、年をへても、おのづからつひには、世の人のしたがふものにて、あまねく用ひらるれば、其の時にいたりては、はじめにねたみそしりしともがらも、心には悔しく思へど、おくればせにしたがはんも、猶ねたく人わろくおぼえて、こゝろよからずながら、ふるきをまもりてやむともがらも多かり。しか世の中の論さだまりて、皆人のしたがふよになりては、始よりすみやかに改めしたがひつる人は、かしく心さとおもはれ、ふるきにかゝづらひて、とかくとゞこほれる人は、心おそくいふかひなく思はるゝわざぞかし。(卷二)

一〇 おのが物まなびの有りしやう

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなん、よろづよりもおもしろく思ひて、よみける。さるははか／＼しく師につきて、

江戸にありし家
 宣長の義兄宗五郎が江戸神田紺屋町に開いてゐた分店。
 百人一首改観抄
 百人一首を註釋したもの。三卷ある。

わざと學問すともあらず。何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなく、たゞからのやまとのくさくさのふみを、あるにまかせ、うるにまかせて、ふるきちかきをもいはず、何くれとよみけるほどに、十七八なりしほどより、歌よまゝほしく思ふ心いできて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひてまなべるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集ども、古きちかきこれかれと見て、かたのごとく今の世のよみざまなりき。かくてはたちあまりなりしほど、學問しにとて京になんのぼりける。さるは十一のとし、父におくれしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへうしなひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、くすしのわざをならひ、又そのためによのつねの儒學をもせんとてなりけり。
 さて京に在りしほどに、百人一首の改観抄を人にかりて見て、はじ

契沖
 難波の東なる高津の圓珠庵に住んだ僧で有名な國學者、元祿十四年歿、六十二歳。
 餘材抄
 古今集餘材抄の略。古今集の註解、二十卷ある。

勢語臆斷
 伊勢物語の註釋。四卷ある。

國
 宣長の郷國伊勢。
 冠辭考
 賀茂眞淵の著。枕詞の語原等について研究したもの。

めて契沖といひし人の説をしり、そのよにすぐれたるほどをもしりて、此の人のあらはしたる物、餘材抄、勢語臆斷などをはじめ、其の外もつぎく、にもとめ出でて見けるほどに、すべて歌まなびのすぢのよきあしきけぢめをも、やうく、にわきまへさとりつ。さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは、大かた心かなはず、其の歌のさまをかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみに、こゝかしこの會などにも出でまじらひつゝ、よみありきけり。さて人のよむふりは、おのが心にはかなはざりけれども、おのがたてゝよむふりは、今の世のふりにもそむかねば、人はとがめずぞ有りける。そはさるべきことわりあり、別にいひてん。さて後、國に歸りたりしころ、江戸よりのぼれりし人の、近きころ出でたりとて、冠辭考といふ物を見せたるに、ぞ、縣居大人の御名をも始めてしりける。かくて其のふみ、はじめに一

神書
古事記・日本書紀等、わが國の神代の風俗・狀態を知り得る方面の書。

わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりこととほくあやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれまれには、げにさもやとおほゆるふしくも、いできければ、又立ちかへり見るに、いよ／＼げにとおほゆることおほくなりて、見るたびに信ずる心の出で來つゝ、つひにいにしへぶりのこゝろことばの、まことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみぞ多かりける。おのが歌まなびの有りしやう、大かたのごとくなりき。さて又、道のまなびは、まづはじめより神書といふすぢの物、古きちかき、これやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどより、わきて心ざし有りしかど、とりたてゝ、わざとまなぶ事はなかりしに、京にのぼりては、わざとも學ばんとこゝろざしはすゝみぬるを、かの契

田安の殿

田安家は徳川氏の分家で三卿の一。この時の主人は宗武である。宗武は國學を好み著書が多い。賀茂真淵の歿した年、即ち明和六年に薨じた。

沖が歌ぶみの説になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものゝ説くおもむきは、みないたくたがへりと、はやくさとぬれば、師とたのむべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむねを考へ出でんと思ふこゝろざし深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすがへすよみあぢはふほどに、いよいよ心ざしふかくなりつゝ、此の大人をしたふ心、日にそへてせちなりにしに、一年此のうし田安の殿の仰事をうけ給はり給ひて、此のいせの國より、大和・山城など、こゝかしこと尋ねめぐられし事の有りしをり、此の松坂の里にも二日三日とどまり給へりしを、さることつゆしらで、後にきゝていみじくくちをしかりしを、かへるさまにも又一夜やどり給へるをうかがひまちて、いと／＼うれしく、いそぎやどりにまうてゝ、はじめて見え奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて、教を承ることにはなりたりきかし。(卷二)

一一 縣居のうしの御さとし言

宣長三十あまりなりしほど、縣居の大人のをしへをうけたまはり
そめしころより、古事記の註釋を物せんのことろざし有りて、その
ことうしにもきこえけるに、さとし給へりしやうは、われももとよ
り神の御典をとかんと思ふ心ざしあるを、そはまづからごゝろを
清くはなれて、古のまことの意をたづねえずばあるべからず。然
るにそのいにしへのこゝろをえんことは、古言を得たるうへなら
ではあたはず。古言をえんことは、萬葉をよく明らむるにこそあ
れ。さる故に、吾はまづもはら萬葉をあきらめんとする程に、すで
に年老いて、のこりのよはひ今いくばくもあらざれば、神の御ふみ
をとくまでにいたることえざるを、いましは年さかりにて、行くさ
き長ければ、今よりおこたることなくいそしみ學びなば、其の心ざ

しとぐることに有るべし。ただし世の中の物まなぶともがらを見
るに、皆ひきゝ所を経ずて、まだきに高きところのほらんとする
程に、ひきゝところをだにうることにあたはず、まして高き所はうべ
きやうなければ、みなひがことのみすめり。此のむねをわすれず、
心にしめて、まづひきゝところよりよくかためおきてこそ、たかき
ところにはのぼるべきわざなれ。わが未だ神の御ふみをえとか
ざるは、もはら此のゆゑぞ。ゆめしなをこえて、まだきに高き所を
なのぞみそと、いとねもころになんいましめさとし給ひたりし。
此の御さとし言のいとたふとくおほえけるまゝに、いよゝゝ萬葉
集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひたゞして、いにしへのこ
ころ詞をさとりえて見れば、まことに世の物しり人といふ者の神
の御ふみ説ける趣は、みなあらぬから意のみにして、さらにまこと
の意はえ得ぬものになん有りける。(卷二)

一二 おのれ縣居の大人の教をうけしやう

宣長、縣居の大人にあひ奉りしは、此の里に一夜やどり給へりしをり一度のみなりき。その後は、たゞしばしば書かよはしきこえてぞ、物とはひあきらめたりける。そのたびく給へりし御こたへのふみども、いとおほくつもりにたりしを、ひとつもちらさず、いきもたりけるを、せちに人のこひもとむるまゝに、ひとつふたつととらせけるほどに、今はのこりすくなんなりぬる。さて古事記の註釋を物せん、の心ざし深き事を申せしによりて、その上つ卷をば考へ給へる古言をもて假字がきにし給へるをもかし給ひ、又中つ卷、下つ卷は、かたはらの訓を改め、所々書入などをもて、づからし給へる本をもかし給へりき。古事記傳に師の説とて引きたるは、多く其の本にある事どもなり。

古事記傳
古事記の註釋、
本居宣長が畢生
の大著述、三十
五歳の時に筆を
起して三十五年
かゝつて完成し
た。全部四十八
卷。

そも、此の大人、古學の道をひらきたまへる御いさをは、申すもさらなるを、かのさとし言にのたまへることく、よのかぎりもはら萬葉にあからをつくされしほどに、古事記書紀にいたりては、その考いまだあまねく深くはゆきわたらず、くはしからぬ事ども、おほし。されば道を説き給へることも、こまかなることしなれば、大むねもいまださだかにあらはれず。たゞ事のついでなどには、はしばしいさゝかづゝのたまへるのみなり。又からごゝろを去れることも、なほ清くはさりあへ給はで、おのづから猶その意におつることも、まれくにはのこれるなり。(卷二)

一三 師の説になづまざる事

おのれ古典イニシフをとくに、師の説とたがへること多く、師の説のわろき事あるをば、わかまへいふこともおほかるを、いとあるまじきこと

玉かつま 一二 おのれ縣居の大人の教をうけしやう 一三 師の説になづまざる事 一〇五

と思ふ人おほかんめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、後によき考の出で來たらんには、必ずしも師の説にたがふとて、なはゞかりそとなん教へられし。こはいと尊き教にて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。大かた古をかんがふる事、さうにひとり二人の力もて、ことごとくあきらめつくすべくもあらず、又よき人の説ならんからに、多くの中には誤もなどかなからん。必ずわろきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、今はいにしへのこゝろにことごとく明らかなり、これをおきてはあるべくもあらずと思定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよき考もいでくるわざなり。あまたの手を経るまに、さきさきの考のうへを、なほよく考へきはむるからに、つきつゝにくはしくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、

學問の道にはいふかひなきわざなり。又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきをしる期なし。師の説なりとして、わろきをしりながら、いはずつゝみかくして、よさまにくろひをらんは、たゞ師をのみたふとみて道をばおもはざるなり。宣長は道を尊み古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古のこのあきらかならんことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかけんことをば、えしもかへり見ざることあるを、猶わろしとそしらん人は、そしりてよ。そはせんかたなし。われは人にそしられじ、よき人にならんとて、道をまげ古の意をまげて、さてあるわざはえせずなん。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。(卷二)

一四 わがをしへ子に戒めおくやう

吾にしたがひて物まなばんともがらも、わが後に又よき考のいできたらんには、必ずわが説にな泥みそ。わがあしきゆゑをいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明らかにせんとなれば、かにもかくにも、道をあきらかにせんぞ、吾を用ふるには有りける。道を思はで、いたづらにわれを尊まんは、わが心にあらざるぞかし。(卷二)

一五 富貴を願はざるをよき事にする論

世々の儒者、身のまづしく賤きをうれへず、とみ榮えをねがはずよろこばざるをよき事にすれども、それは人のまことの情（情）にあらず。おほくは名をむさぼる例のいつはりなり。まれ（まれ）にさる心な

らん者ありとも、それは世のひがものにこそあれ、なにのよき事ならん。ことわりならぬふるまひをして、あながちにねがはんこそはあしからぬ、ほど（ほど）につとむべきわざをいそしくつとめて、なりのほり富みさかえんこそ、父母にも先祖にも孝行ならぬ。身おとろへ家まづしからは、うへなき不孝にこそ有りけれ。たゞおのがいさぎよき名をむさぼるあまりに、まことの孝をわするゝも、又もろこし人のつねなりかし。(卷三)

一六 ひとむきにかたよることの論

世の物しり人の、他の説（説）のあしきをとがめず、一むきにかたよらず、これをもかれをもすてぬさまに論（論）をなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへんとするもので、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいかにそしると

玉かつま

一四 わがをしへ子に戒めおくやう 一五 富貴を願はざるをよき事にする論 一六 ひとむきにかたよることの論 一〇九

も、わが思ふすぢをまげてしたがふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。大かた一むきにかたよりて他説アゲントキョトをばわろしとがむるをば、心せばくよからぬ事とし、ひとむきにはかたよらず、他説をも、わろしとはいはぬを心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心なめれど、かならずそれさしもよき事にもあらず。よるところ定りて、それを深く信ずる心ならば、かならずひとむきにこそよるべけれ。それにたがへるすぢをば、とるべきにあらず。よしとしてよる所に異なるは、みなあしきなり。これよければ、かれはかならずあしきことわりぞかし。然るを、これもよし又かれもあしからずといふは、よる所さだまらず、信ずべき所を深く信ぜざるものなり。よる所さだまりて、それを信ずる心の深ければ、それにことなるすぢのあしきことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ信ずるところを信ずるま

めごゝろなり。人はいかにもおもふらん、われは一むきにかたよりてあだし説をばわろしと、がむるも、必ずわろしとは思はずなり。(巻四)

一七 前後と説のかはる事

同じ人の説トキコトの、ことかしくことゆきちがひて、ひとしからざるは、いづれによるべきぞとまどはしくて、大かた其の人の説すべてうきたるこゝちのせらるゝ。そは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。はじめより終まで説のかはれることなきは、中々にをかしからぬかたもあるぞかし。はじめに定めおきつる事の、ほどへて後に又ことなるよき考の出来るは、つねにある事なれば、はじめとかはれることあるこそよけれ。年をへて學問すゝみゆけば、説は必ずかはらでかなはず、又おのがはじめの誤を後にしり

ながらは、つゝみかくさで、きよく改めたるもいとよき事なり。殊にわが古學の道は、近きほどよりひらけそめつることなれば、すみやかにことごとくは考へつくすべきにあらず、人をへ、年をへてこそ、つぎ／＼に明らかには成りゆくべきわざなれば、一人のときごとの中にも、さきなると後なると異なることは、もとよりあらではえあらぬわざなり。そは一人の生のかぎりのほどにも、つぎ／＼明らかになりゆくなり。されば、そのさきのと後のとの中には、後の方をぞ其の人のさだまれる説とはすべかりける。但し又みづからこそ初めのをばわろしと思ひて改めつれ、又のちに人の見るには、なほはじめのかたよろしくて、後のは中々にわろきもなきにあらざれば、とにかくに、えらびは見ん人の心になん。(卷四)

一八 あやしき事の説

もし人といふもの今はなき世にて、神代にさる物ありきと記して、その人といひし物のありしやう、まづ上つ方に首といふ所有りて、その左右に耳といふもの有りて、もろ／＼の聲をよくきゝ、おもての上つ方に目といふ物二つありて、よろづの物の色かたちを、のくるくまなく見あきらめ、その下に鼻といふものも有りて、物のかをかぎ、又下に口といふ物ありて、おくより聲の出づるを唇をうごかし、舌をはたらかすまゝに、その聲さま／＼に變りて、詞となりて萬の事をいひわけ、又首の下の左右に手といふもの有りて、末に岐ありて、およびといふ、此のおよびをはたらかして、萬づのわざをなし、萬づの物を造り出せり。又下つかたに足といふ物、これも二つ有りて、うごかしはこべ百重の山をものぼりこえて、いづこまでもありきゆきつ。かくて又胸の内に隠れて、心といふ物の有りつる、こはあるが中にもいとあやしき物にて、色も形もなきものから、上

の件の耳の聲をき、目の物を見、口のものいひ、手足のはたらくも、皆此の心のしわざにてぞ有りける。さるに此の人といひし物ある時いたくなやみて、やう／＼に重りもてゆくほどに、つひにかのよろづのしわざ皆やみて、いさ／＼かうごくこともせずなりてやみにきと記したらん書を、儒者の見たらんには、例の信ぜずして、神代ならんからに、いづこのさるあやしき事があるべき、すべて／＼理もなく、つたなき寓言にこそはあれとぞいはんかし。(巻五)

一九 花のさだめ

花はさくら、櫻は山櫻の、葉あかくてりて、ほそきがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて、花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山ざくらといふ中にもしな／＼の有りて、こまかに見れば、一

有りてよの中云
云
のこりなくちる
ぞめてたき櫻花
ありて世の中は
てのなれば。
(古今集)

木ごとにいささかかはれるところ有りて、まったく同じきは、なきやうなり。又今の世に、桐がやつ八重一重などいふも、やうかはりて、いとめでたし。すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何もあをやかにしげりたるこなたに咲けるは、色はえてことに見ゆ。空きよくはれたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花ともおほえぬまでなん。朝日はさらなり、夕ばえも。

梅は紅梅、ひらけさしたるほどぞ、いとめでたきを、さかりになるまに、やう／＼しらせゆきて、見どころなくなるこそ、いとくちをしけれ。さくらの咲けるころまでも、ちることしらで、むげに匂なくねびれしほみて、のこりたるを見れば、げに有りてよの中は、何事もみなかくこそと、見る春ごとにおもひしらるか。白きはすべて香こそあれ、見るめはしなおくれたり。大かた梅の花は、ちひさき

枝を物にさしてちかく見たるぞ、梢ながらよりはまされる。
 桃の花はあまた咲きつゞきたるを遠く見たるはよし、ちかくては
 ひなびたり。山ぶきかきつばたなでしこ萩すゝき女郎花など、と
 りどりにめでたし。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ、あ
 まりうるはしくしたゝかにつくりなしたるは、中々にしななくな
 つかしからず。つつじ、野山に多く咲きたるはめさむるこゝちす。
 かいだうといふ物、からめきてこまやかにうるはしき花なり。
 そも、かくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ、人は又おもふ
 心ことなんべければ、一やうにさだむべきわざにはあらず。又い
 まやうのよの人のもてほやすめる花ども、よにおほかるをかぞ
 へいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にもよみたらす、ふる
 き物にも見えたることなきは、心のなしにや、なつかしからずおほ
 ゆかし。されど、それはたひとやうなるひがこゝろにやあらん。

(卷六)

二〇 あだし國あることを知らざりし事

もろこしの國のいにしへの人、すべて他國アマレクニあることをしらず。お
 ほかた國を治め身をさむる道よりはじめて、萬の事みな其の國
 のいにしへの聖人といひし物のはじめたるごとく心得て、天地の
 間に國はたゞわれひとり尊しとよろづにほこりならひたり。然
 るをや、後に、天竺といふ國より佛法といふ物わたり來ては、いさ
 さかあだし國のあることをもしれるさまなり。かくて近き世に
 いたりては、かの天竺よりもはるかに西のかたなる國々の事もや
 うやうしられて、おほかた今は、天地の間の萬づの國の事をさゝ
 しられざるはなきを、そのはるか西の國々にも、もろこしにある
 かぎりの事は皆むかしより有りて、もろこしにはなき物も多くあ

天竺
印度。

り。もろこしよりはるかにまされる事も有り。その國々はみな
 近き世まで、もろこしと通ひはなかりしかども、元よりしか何事も
 たらひてあるぞかし。そも、もろこしの古は、たゞその近きほ
 とりなる胡國などいふ國の事のみをわづかによくはしりて、其の
 外はさしも遠からぬ國々の事も、こまかにはしらず、おぼしく
 て、すべて他國の事いへるはみだりごとのみなり。かくてそのよ
 くしれる胡國などは、いたづらに廣きのみにして、いと卑しくわろ
 き國なるを、つねに見しり聞きしりては、他國はいづれも皆かゝる
 物とのみ思へりしから、何事もたゞたふときは吾ひとりと、みだり
 にほこれるなり。いにしへあだし國の事をひろくしらざりしほ
 どこそさもあらめ、近き世になりて遠き國々の事もみなよくしら
 れても、猶古よりのくせをあらたむることなく、今に同じさまにほ
 こりをるなるを、皇國にても學問をもする人は、今は萬の國々のこ

とをも大かた知りたるべきに、なほむかしよりの癖にて、もろこし
 人のみだりごとを信じて、ひたぶるにかの國を尊みて、何事もみな
 かの國より始まれるやうに思ひ、かの國より外に國はなきこと心
 得居るは、いかなるまどひぞや。(卷七)

二 道のひめごと

いづれの道にも、其の大事とて世にひろくもらさず、ひめかくす事
 おほし。まことに其の道大事ならば、殊に世に廣くこそせまほし
 けれ。あまりに重くしてたやすく傳へざれば、せばくなりて絶え
 やすきわざぞかし。そもみだりにひろくしぬれば、其の道かるが
 ろしくなること、いふなるも、一わたりはことわりあるやうなれ
 ども、たとひかるくしくなるかたはありとても、なほ世にひろま
 るこそはよけれ。廣ければおのづから重きかたはあるぞかし。

いかにおもくしければとても、せばくかすかならんは、よきことにあらず。まして絶えもせんには、何のいふかひかあらん。されど近き世に、道々に秘傳口訣などいふなるすぢ、多くは道を重くすといふは、たゞ名のみにて、まことは人にしらすずて、おのれひとり物にして、世に誇らんとするわたくしのきたなき心、又それよりもまさりてきたなき心なるぞ多かる。さるたぐひも、もろくのはかなき伎藝の道などは、とてもかくてもありぬべけれど、うるはしくはかゝしき道には、さること有るべくもあらず。(卷九)

二二 歌を思ふほどにあること

歌よまんとて思ひめぐらすほど、一ふし思ひえたる事のあるに、心のごといひとゝのへがたくて、時うつるまで思ひ、あるは日をかさねても同じすぢにかゝづらひて、とかくつゞけみれどもつひに事

ゆかぬ事あるものなり。さる折はそのふしをばきよくすてゝ、さらにほかにもとむべきわざなるを、さすがにをしくすてがたくて、あかずはおぼえながら、いかゞはせんに、しひてつゞり出でたるいと心ぎたなきわざにはあれども、たれもよくあることなり。又さやうに久しく思ひわずらひたるほどに、そのかゝづらへるすぢにはあらで、思ひかけぬよき事の、ふとかたはらより出で来て、たやすくよみ出でらるゝ事もありかし。されどそれも深く思ひ入りたるから、さるよき事も出で来るにて、初めよりのいたつきのいたづらになれるにはあらずなん。抑、これらは、えうもなきあだごとなれども、思ひ出でたるまゝに書きいでたるなり。(卷十二)

二三 しづかなる山林を住みよしといふ事

世々の物しり人、又今の世に學問する人なども、みなすみかは里と

ほくしづかなる山林を、すみよくこのましくするさまにのみいふなるを、われはいかなるにか、さらにさはおぼえず、たゞ人げしげくにぎは、しき處の好ましくて、さる世ばなれたる處などは、淋しくて心もしをるゝやうにぞおぼゆる。さるはまれゝにものして、一夜たびねしたるなどこそは、めづらかなるかたにかしくもおぼゆれ、さる處につねにすまゝほしくはさらにおぼえずなん。人の心はさまゝなれば、人うとくしづかならん處をすみよくおぼえんもさることにて、まことにさ思はん人もよには多かりぬべけれど、又例のつくりごとの漢ぶりの人まねにさいひなして、なべての世の人の心とことなるさまにもてなすたぐひも、中には有りぬべくや。かく疑はるゝも、おのが俗情サレヒゴコロのならひにこそ。(卷十三)

二四 おのが京のやどりの事

のりなが享和のはじめのとし、京にのぼりて在りしほどやどれりしところは、四條の大路の南づらの烏丸のひんがしなる所にぞ有りけるを、家はやゝ奥まりてなん有りければ、物のけはひうとかりけれど、朝のほど夕ぐれなどには、門に立出でつゝ見るに、道も廣くはれゝしきに、ゆきかふ人繁くいとにぎは、しきは、ゐなかに住みなれたるめうつしこよなくて、めさむるこゝちなんしける。京といへど、なべてはかくしもあらぬを、此の四條の大路などは、ことにぎは、しくなんありける。天の下三ところの大都の中に、江戸・大阪はあまり人のゆきゝ多くらうがはしきを、よきほどのにぎはひにて、よろづの社々寺々など、古のよしある多く、思ひなし尊く、すべて物きよらに、よろづの事みやびたるなど、天下にすまゝほしき里は、さはいへど京をおきて外にはなかりけり。(卷十三)

駿臺雜話

室直清の隨筆で、五卷ある。直清は鳩巢と號し、幕府の儒官となつて江戸駿河臺に住んだ。享保十九年歿、七十七歳。

忍が岡

今の上野公園。

將軍家

寛永の頃とあるから、三代將軍家光のことであらう。

六 駿臺雜話

一 老僧が接木

忍が岡のあなた谷中のさとに、何がしの院とて、ひとつの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、其の住僧をしりてしばしば寺に行きつづ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人にむかひて、前住の時の事をなん語りしをき、侍りしに、寛永の頃の事になん、將軍家谷中あたり御鷹狩のありし時、徒歩にてこゝやかしこ御過ぎがてに御覽ましましたしけるが、此の寺へもおもほえず渡御ありしに、折ふし其の時の住僧はや八旬に及びて、庭に出でて、みづはぐみつづ、手づから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、お側に二人三人つき奉りしを、中々やんごとなき御事をば思ひよらねば、そのまゝ背き居たりしを、房主に事するぞ。」と仰せられしを、老僧

心にあやしとおもひて、いとはしたなく、接木するよ。」と御いらへ申せしかば、御わらひありて、「老僧が年にて、今、接木したりとも、其の木の大きになるまでの命も知れがたし。それにさやうに心をつくす事の不用なるぞ。」と上意ありしかば、老僧、「御身は誰人なれば、かく心なきことをきこゆるものかな。よくおもうて見給へ。今、此の木どもつぎておきなば、後住の代に至りて、いづれも大きになりぬべし。然らば林も茂り寺も黒みなんと、我は寺の爲をおもうてする事なり。あながちに我一代に限るべき事かは。」と言ひしをきこしめして、「老僧が申すこそ實にもことわりなれ。」と御感ありけり。
その程に御供の人々おひくゝ來りつづ、御紋の御物ども多くつどひしかば、老僧それに心得て大きに恐れて、奥へ逃入りしを御めし出しありて、物など賜りけるとなん。

死しても骨朽ち

白樂天が故京兆元少尹の遺集に題した詩に「遺文三十軸、軸々金玉聲、龍門原上土、埋骨不埋名」とある。これらの意をとつたのであらう。

いま翁も、此の老僧が接木するごとく、老いくちぬれども、あるかぎりには舊學をきはめて、人にもつたへ書にものこして、後世にいたりて正學のひらくるはしにもなり、此の道のために萬一のたすけともなりなば、翁死してもなほいけるがごとし。古人のいはゆる「死しても骨くちじ」といひしこそおもひあたりはべれ。いさゝか我が身のために圖るにあらず。諸君も翁がこのころを信じたまへかし。(卷二)

二 武運の稽古

ある時、わかき人々、武藝の場より歸るさに、翁が菴へ來て、例の文談に及べり。翁いふやう、「武藝は各の家業といふべければ、常に稽古あるべきことなり。但し武藝と武運といづれか重きこととおもひ給へる

長湫の戦

天正十二年豊臣秀吉と織田信雄との合戦、この時家康が信雄を助けた。

森武藏守

名は長可、秀吉旗下の勇將。

翁は武藝より武運は重き事とおもひ侍る。其の故は、いかに武藝に達したる人なりとも、武運つきなば何の詮かあるべき。長湫の合戦に、森武藏守は打物取つて鬼武藏といはれけれども、かけ出づるとひとしく銃丸に中りて即時に果てぬれば、武藝も武勇も用ふべきやうなく侍る。然れば武運ありての武藝ならずや。各武藝の稽古あらば、先づ武運の稽古し給へかし。さて武藝の稽古は、それぞれに師に問ひ給はゞくはしかるべし。武運の稽古において、は、藝術の師の知る事にては侍らず。それは翁などこそ。「と語りぬのこしけるに、座中ひとり、翁の仰せ事には候へども、武運の稽古と申す事こそうけられ候はね。昔より人力の及ばぬ事なればこそ、武運とは申しつれ。もし稽古にて及ぶ事ならば、誰か稽古せざるべき。」といへば、翁かしら打振りて、「いや武運に稽古こそ侍れ。」「さらば承らん。」といへば翁「各思案して見給へ。運はいづくより出

づる事にて侍る、天より出るにあらずや。されば世話にも、運は天にありと申候。とかく運をば天に禱るより外はなかるべし。天の心に叶はんとすれば、天の好める事は何事ぞ、惡める事は何事ぞと尋ぬべし。翁つら／＼天の好惡を案じ見るに、天は仁をこのみて甚だ不仁を惡む。信を好みて甚だ不信を惡む。其いはれをいふに、天はたゞ萬物を生ずるを心とする故に、古より今に至るまで年々人物を生じ／＼てやむことなし。秋冬肅殺の氣行はるゝといへど、果して肅殺するには非ず。生氣を固うして根へ歸せしめ、春を待ちえて又發生せんとなり。易に「生々之謂易」といひ、天地之大徳曰「生」といへるは此の事なり。天にありて物を生ずるは、人在りては人を愛するなり。各是をもて見給はゞ、天の仁を好みて不仁をにくむといふ事、疑なかるべし。又信を好む事をいはゞ、日月星辰の行度、萬古を経ても一日の如し。日月の食を見給へ。遙

に大空の外なる事を、こゝもとにて推歩するに、分秒までもたがはず、是に過ぎたるたしかなる事あるべきや。天下の至信といふべし。然れば、人は、外の事はしばらくさしおく、たゞ仁にして信にだにあらば、おのづから天心に叶ふべし。天心に叶はゞ、なか擁護なかるべき。さりとしてしばらく仁を行ひ、假に信を守りて其驗あるべきとにはあらず。是は平生にある事なり。常に仁を好みて人をそこなはず、常に信を篤うして人を欺かず。かくしつゝ、歳月を積みなば、其の誠天にこたへて、はからざるに自然の冥助もありなん。されば戰場にても、おのづから禍機に觸れず、矢石にもあたらざるべし。翁が武運の稽古といふは、是を申すにてこそ侍れ。老人の僻言と聞きたまふべからず。たゞなげかしきは世俗の有様なり。專に身を利して人をそねみ、偏に智を恃みて詐を飾る。自らこれを世を渡るよき計とこそ思ふらめど、終には天に見捨て

三つ葉四つ葉に云々

この殿はうべも富みたりさきくさの三葉四葉に殿づくりせり。

(催馬樂)

られぬべし。人として天に見捨てられなば、いかでかよき事のあるべき。翁わかき時より、世に時めく士大夫の邸宅を過ぎて見るに、三つ葉四つ葉に作りならべたるに、歳々に諸寺諸山より捧げすゝめける武運長久といふ牌を、門に釘せぬはなし。然るに其の家或は刑戮せられ、或は子孫斷絶して、武運長久の牌は其のまゝ門にありながら、主うせ家滅びて跡方もなく成りゆくも、あまた有るにて侍る。又それ程にこそ侍らぬ、身を辱しめ名をおとして、晩節を保たざるもいくばく人ぞ。是等は皆武運の稽古なき故にこそとおしはからるれ。日ごろ稽古なくして、祈禱厭勝の力にて武運を守らんとおもふ事、至つておろかなりといふべし。孔子も「獲罪於天、無所禱也」とこそ宣へれ。凡そ神にこび佛に詣うて、符章陀羅尼やうのことを信ずる、婦女などのするはいかゞせん、丈夫たる者の有るべき事にはあらず。然るに、近世士大夫より上つた、民の師

獲罪於天云々 (論語八佾篇)

毛詩 詩經のこと。

表たる人も、こゝに惑はざるはすくなし。されば、左道の民間に行はれてはてしなきも、是誰が過ぞや。」とて、翁毛詩の「瞻烏爰止、于誰之屋」といふを打吟じて、慨嘆におよびしが、いかなる心にかありけん。(卷二)

三 善悪の報

しばらくありて、座中よりいひけるは、武運の稽古と申す事、あたらしき事承りて感服し侍る。今より此の稽古わすれ怠るまじきにて候。但し世には仁にして信ある人に禍あるもあり、不仁、不信なる人に福あるものあり。顔回は大賢なれども貧窮にして夭し、盜跖は大盜なれども富厚にして壽し。翁のいへる武運の稽古も、ここに至りて少し疑はしうこそ候へ。是はいかゞ心得侍るべきにて候。翁「それ善をすれば福あり、悪をすれば禍あるは、是正理の前

顔回 孔子の高弟。
盜跖 柳下惠の弟。孔子と同時代の大盜。

にて必定の事なり。それに幸あり不幸あるは、時の仕合にて不定なる事なり。聖人はたゞ正理を説き給ふにて侍る。不定の事をばいかで説き給ふべき。たとへば身に病なく長命ならんと思はば常に酒色をいましめ養生するにあり。主君の氣にあひ立身せんとおもはゞ、職事を懈らずしてよく奉公するにあり。然るに養生よくても天死する人あり、養生あしくしても長命なる人あり。さればとて、養生しても益なし、養生せずしても害なしとはいふべきや。よく奉公しても、不幸にて立身せざる人あり、奉公よくせずしても、幸にて立身する人あり。さればとて、よく奉公しても益なし、奉公よくせずしても害なしとはいふべからず。もし養生しても益なしといひて、日夜酒色を恣にせば、やがて病死に至るべし。しかれば、養生は長命を得るの道、奉公は立身を得るの道たるべし。

商書
書經の中の篇
名。

は、是不易の理といふべし。各よく考へて見給へ。何事にてもあるか、かねて覺悟を定め給はんには、道理の前にて定まりたる方にきめ給はんや、時のしあはせにて定まらぬかたに極め給はんや。道理の前にて定まりたる方に極め給ふにてあるべし。道理にて極めたる事は、縦ひ違ひても後悔なかるべし。しあはせを頼みては、覺悟も定らぬものなり。それ故に、かねてのあらまし違ひぬれば、必ず臍を噬むぞかし。されば善に福し、惡に禍すといふは、道理の前なる事なり。聖人の教も君子の守も、道理の前にて極めて、其上、吉凶禍福は天に任する外はなき事なり。況や、道は人の當然の事なれば、福を得んとて善をなし、禍を恐れて惡をなさぬといふにもあらず。この故に、孔孟の人を教へ給ふを見るに、善に福し、惡に禍するの沙汰に及ぶ事なし。商書にこそ、天道は「福善禍淫」とは見えたる。是はもろく、愚頑なる民に命じ給ふによりて、かくは

釋氏
釋迦。

ありし事ならん。然れども、これ道理の至極したる事なれば、釋氏
の方便などやうの事と、同日の談にはあらざるべし。(卷二)

四 直諫は一番槍より難し

東照宮、遠州濱松の御城に御座なされし時、ある夜、本多佐渡守並に
外様の者三人、御用の事ありて御前に召出さる。御用すみて、三人
の者は退出しけるが、中に一人、御前にて鼻紙袋より筆記の物一通
取出し、自身に御前へ持ちてさしあげけり。「それは何ぞ。」と御尋
ねあれば、「日ごろ私の存じよりに候事ども、書付けおき申し候。憚
りながら、萬に一つも御心得にもなるべきかと存知候うてさし上
候。」由を申しければ、「それは奇特なる心入かな。」と御感なされ、佐
渡守はきゝてもくるしからず。それにて讀みて聞かせよ。」と仰
せらるゝ程に、數箇條ありしを段々讀みけるに、一箇條を讀終る毎

東照宮
徳川家康。
本多佐渡守
名は正信、家康
の重臣。

に、「尤なる事」と御挨拶ありて、「其の筆記の物是へ。」とて御取りあそ
ばし、さて仰せられけるは、「是に限らず、此の後も存じよりの事あ
らば、少しも遠慮なくいひきかせよ。」とありしかば、「御聞きとゞけ
あそばされ、かたじけなく存じ奉る。」と申して御前を立ちけり。
其の跡に佐渡守残り居けるが、さても彼の者、卒爾なる仕かたにて
候。それに一箇條も御用に立ち申すべきと存ずる事はきこえ申
さず候。」と申上げければ、御手をふらせ給うて、「いやとよ、さして用
にたつほどの事はなけれども、其の身相應の思案をつくし、内々書
付け置いて我等に見せんと思ふ志は、なによりも奇特なる事ぞか
し。其の言ひ上る事、用にたてばとり、用にたゝねばとらぬまでに
てこそあれ。卒爾なこしかたなどといふべき事にはあらず。惣
じて上も下も、我が身の過は知らぬものなり。されど小身なる者
は、心安き友達、傍輩などあれば、たがひに身の上の悪しき事をいう

て吟味もする程に、心付きて改むる事おほし。是は小身の益なり。大身なるものは、友達、傍輩と出合ひて心安く語るといふ事もなければ、常に出合ふものとは、家臣所従ばかりなり。それらは、大方の事をば、御尤とならではいはぬほどに、我が過を知るべきやうなし。しらねば改むる心もつかずして打過ぐるのみなり。是は大身の損といふべし。古より富貴なる者の國を失ひ家を亡すは、大かた我が過をいひきかするものなくて、自身にする事をよきとばかり思ふ故なり。しかれば、わが悪事を告げしらする者は大切に思ふべきにあらずや。」と仰せられしを、佐渡守承りて覺え居けるが、あるとき嫡子上野介に語りきかせ、上の御思慮のふかきにそへて御仁厚なる事をいうて落涙に及びしに、上野介きゝて、「其の人は誰にて候ひつる。其の申上げし事はいかやうの事にて候や。」と尋ねられければ、佐渡守、上野介を叱りて、「たゞ上の思召の結構なる

上野介
名は正純。

駿府
今の静岡市。家
康は隠居の後こ
の城に住んだ。

事を思ふべし。其の人の名も、その申上げし事も、汝きゝて何にせんとおもふぞ。」とて、いひきかせざりしとぞ。上野介年わかにて其の人を嘲る心にて、をかしく思うて名をきゝ、其の事をきかんといはれしを、佐渡守合點して押へられしなるべし。其の後駿府の御城に御座なされし時、御側に侍座の衆へ上意ありしは、人君はよき家老を持つべき事なり。我常におもふに、主君の悪事あるを見て、主君の怒をもかへり見ず諫言をいゝ家老は、戰場にて一番槍をするよりも、遙にまさりたる心ばせといふべし。其の子細は、敵に向つて勝負をするも、身命を庇ひてはならぬ事なれども、必ず敵にうたるべきにもあらず。たとひ討死しても、世に名を残し主君にもをしまれぬれば、死しても本望なる事なり。又敵を討取りぬれば、主君の感にあづかり恩賞を得て子孫にも傳はれば、戦場のはたらきは生死とも心にいさみあるべし。それとは

ちがうて、主君の無道なるをなげきて、しばく直諫すれば、忠言耳に逆ふ習にて、主君の心にはぬ程に常にいとひ嫌はれて、たゞ禮貌にてあひしらはれ、日に疎遠になるものなり。それに新進容悦の諂ひものども、件の家老を事にふれて讒する程に、日を逐うて主君の目見せあしくなりて、何をいうても用ひられず。其の時はいかなる忠臣も退屈する故に、或は病氣と稱し、或は致仕をねがうて身を引退く分別するぞかし。然るに、主君の氣に背くにもかまはず、幾度もすゝみいでて極諫しなば、主君怒を積みて、手討にするか又は押籠めて出さぬやうにするにてあるべし。それを露も心にかけず、たゞわが報國の志をつくして終るは、世にありがたき忠臣といふべし。是に比すれば、戦場の一番槍は却てやすき道理なり。と仰せられしとなん。誠に萬世御子孫の御事は申すに及ばず、すべて人君たる人の永き鑑戒となるべき御言葉どもなり。(卷三)

五 杉田壹岐

寛永
八代將軍家光の
時の年號。
故伊豫守
越前福井の藩祖
松平忠昌。

寛永のころ、越前故伊豫守殿の家老に、杉田壹岐といふ者あり。もとは足輕なりしが、其の身の材をもて、微賤より登庸せられ、厚祿をうけ、國老に列しけり。伊豫守殿參觀にて、一年在江戸の内、費用過分なりしを、常に前年より支度して、用度足るやうにしけるは、ひとへに壹岐が功なりしとかや。それはさる事にて、常に顔を犯して直言して、君の過を匡救する事を忘れず。ある時、伊豫守殿在國にて鷹狩し、晡時に及びて歸城あり。家老どもに對して、「今日わか者どものはたらき、いつにすぐれて見えし。あれにては萬一の事もありて出陣すとも、上の御用にもたつべしと覺ゆるぞかし。其方どもも承りて、いづれも喜び候へ。」とありしかば、家老どもいづれも、「御家のため、何よりめでたき御事にて候。」

といひしに、壹岐一人末座にありけるが、黙々として居たりしを、何とぞいふかと、しばらく見あはせられしが、こらへかねられ、壹岐は何とおもふ。」とありしに、其の時壹岐「只今の御意承り候に、はゞかりながら歎かしき御事に存じ候。當時士ども御鷹野などの御供に出で候とは、さきにて御手討になり候はんも計りがたく候とて、妻子に暇乞して立別れ候と承り候。かやうに、上を疎み候うて思ひつき奉らず候うては、萬一の時御用に立つべきとは存ぜられず候。それを御存知なく、頼もしく思しめさるゝとの御意こそ、愚なる御事にて候へ。」といひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じければ、何がしとかやいひし者、伊豫守殿の刀もちて側に居たりしが、壹岐に「座を立ち候へ。」といひしを壹岐聞きて、其の人をはたとにらみ「何れもは、御鷹野の御供して猪猿を逐うてかけ廻るを御奉公とす。此の壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な。」と

て、其のまゝ脇指を抜いてうしろへ投げすて、伊豫守殿の側へ進みより「たゞ御手討に遊ばされ候へ。むなしくながら候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はんよりは、只今御手にかゝり候はゞ、せめて御恩の報じ奉る志のしるしと存じ候はん。」といひて、頭をのべ平伏しけるを見給ひて、なにもいはて奥へいられけり。其のあとにて、外の家老ども壹岐にむかひて、「御爲を思ひて申されしは尤にて候へども、折もあるべき事にて候。今日、御鷹野より御機嫌にて御歸りありしに、御氣さきををられ候事は、遠慮もあるべき事にこそ。」と云ひしを壹岐「君へ諫を申上げ候に、御機嫌を考へ候ひては、よき折とてはなき物にて候。今日はよき序とこそ存じ候へ。其の上某事は、御取立の者にて候へば、各とは譯の違ひたる者にて候。御手討にあひ候うても、其の分の事にて候。」といひければ、諸家老各感じあひける。

さて家に歸りつゝ、切腹の用意して、君命の下るを待ちけるが、日ごろ糟糠の妻のありけるにむかうて、其の許にいひおく事たゞひとつ侍り。御身は女の身なれば、直に御恩をうけたるにてはなけれども、我御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、今歴々の妻として、大勢の所從に圍繞せられしは、かぎりなき御恩にあらずや。しかれば、われ生害仰付けらるゝ後にても、たゞ朝夕、今まで御恩の有りがたかりし事を忘れずして、かりにも上を怨み奉る心あるべからず。もし女心とて、我が身のものうきにつけて、上を怨み奉るやうなる事を、言葉の末にもつゆおきなば、黄泉の下までもふかく怨と思ふべし。」といひける。

さて今やと待ちけるに、夜ふくる程に人來て門を叩きしが、「召あるまゝ登城すべし。」となり。さてこそとおもひて登城しけるに、すぐに寢所へめし入れ、其方が晝いひし事、心にかゝりて寢られぬ間、

夜陰なれどもよびつるなり。わが誤りたる事は、とかくいふに及ばず。其方が心ざしをふかく感じ思うて満足する。」との事にて、直に腰の物を賜りしかば、壹岐も思ひ寄らぬ事にて、おぼえず落涙に咽びつゝ、拜賜してまかり出でけるとぞ。(卷三)

六 燈臺もと暗し

三伏の夏もはや半ば過ぎ行きし頃、人々すゞみがてらに駿臺の菴にとぶらひ來けり。折ふし積雨新に霽れて、夕日梢にのこれるに、庭の竹樹露すゞしく、池の芙蓉風かをり、なにとなく見すぐしが、たき折からなり。諸客はしゐしつゝ、勾欄によりて詩歌を朗詠しけるが、はやものゝあやめも見えぬばかりに暮れゆけば、やがて内に入りて翁にいとま申さんといふを、「今しばしとあれば、さらば宵の間過ぐる程、こゝにありて御物語承らん。」とて各坐につきけり。

道在_レ邇_ニ云々
孟子離婁章句上
にある句。

羅大經
宋人、字は景綸、
廬陵の人。
鶴林玉露
羅大經著。十八
卷、天地人の三
集に分つ、一種
の隨筆。

しばらくありて燭もて至りぬるに、翁ふとおもひよりしまゝ、燭臺をさして、「世俗の諺に燈臺もと暗しといふは、いかやうの事にたとへていふにやあらん。おのゝゝいうて見給へ。」とあれば、座客の中ひとりいひけるは、「世に何事にもあれ、外にはかくれなき事を、そのもとにてきけば却て分明ならぬやうの事に、かく申しならし候。但し我等が愚見にて、是に道理をつけて申し候はゞ、孟子の「道在_レ邇_ニ而求_レ諸_ニ遠_ニ」といふ意にも喩へば、たとへつべし。人ごとに本を忘れて末をつとめ、近きをすてゝ遠きに求むるは、常の事にて候。是を弓射る者の、的のみに志して、あたりの手前にある事を知らぬにたとへたれば、燈臺のもと暗きにたとへても、同じこゝろならんかし。」亦ひとり聞きて、「されば其の事にて候。羅大經が鶴林玉露に、悟道といふ尼の作とて、

盡日尋_レ春_ヲ不見_レ春_ヲ

芒屨踏_レ遍_レ隴頭_ニ雲

歸來笑_レ撚_レ梅花_ヲ嗅_レ

春在_レ枝頭_ニ已_ニ十分

東晋
西晋の後に立つた國、十一代、百三年で宋に併せられた。
桓温
東晋末の將軍、權勢を張り專恣を極めた。
三秦
函谷關以西、散關以東、古の秦の地。
王猛
西秦の符堅に仕へて大に之を輔けた人。

是も道のちかきに在りて遠きに求むるたとへなり。終日山野に春を尋ねくらして、春はとくにわが宿の梅にある事をしらずといへるも、燈臺もとくらきの意にもよくかなひて、いとゞおもしろくこそ候へ。」又ひとり、「道のさたばかりにも限らず、外の事にもあるべし。たとへば東晋の時、桓温三秦に打入りしに當つて、王猛來見しけるに、「三秦の豪傑、なにとていまだ一人も見え來らぬ。」と問ひしにぞ、桓温が眼のくらきもしられけり。三秦の豪傑王猛に過ぎたるものやあるべき。眼前に豪傑あるをしらずして豪傑にむからず、豪傑を問ひしは、燈臺もとくらきにて候はずや。」又ひとり、「古より倭漢共に英主の遠略をつとむるが、其の威望遠く敵國に及べども、まぢかく蕭牆のもとに敵ある事をしらざるも、燈臺もと暗きにたとふべし。近代日本にていはば、織田信長、關東關西の諸國

まで手をのばし討ちしたがへられしかども、手本にくらうして明智にころされし、燈臺もとくらきにあらずや。」といふを、翁きゝて、「すべて比喩の語は、義理のとりやうにて色々に申さるゝ物にて候。此の諺も各たがひに其の義をつくされしにて、もはや此の外はあるまじく覺え侍る。但し各の申さるゝはいづれも燈臺もと暗しをあしきかたにたとへらるゝにて候。翁は又此の諺をよろしき方に取りなして聞きたくこそ侍れ。又一種の道理もあるべきにや。韓退之が短檠の歌に、『長檠八尺空自長。短檠二尺便且光』とつくれるごとく、燭臺も長きは燭のもとくらく、短きは燭のもとあかるし。夜中に書をよみ、字を寫すやうの事には、手もとを明らかにして其の用をかなふる故に、短きを貴ぶにて候へども、さりとして一二尺の手燭にては、燭のもとこそあかるくあるべけれ、此の座上にても、くまゝのくらきを照しぬる事は難かるべし。まいて稠

關尹子
周の尹喜が撰し
たものといはれ
る書。

道德經
老子の著、普通
に老子といつて
ぬる。

人廣座をいかゞして照し申すべしや。しかれば、もとをあかるくしては遠きを照し難し。遠きをてらすは必ずもと暗きものとしるべし。翁いつの比か、關尹子を見侍りしに、「吾が道は暗きに處るがごとし。よく明中の事を區畫す。」といへり。關尹子は關令尹喜が書なり。尹喜は老子の弟子にて、道德經五千言も此の人の爲にあらはせるとなり。今世に傳ふる關尹子の書は、大かた後人の作にて尹喜に名を託したる物にてあらんかし。されど老子の道は、たしかに暗きに處るを宗とすることにて侍る。但し老子の道にも限るべからず。吾が儒にも簡要とする事なり。たとへばわが身くらがりにて、くらがりよりあかりを見ればあかりの事残なく見ゆるものなり。わが身あかりにて、あかりよりくらがりを見ては、くらがりの事一切見えぬものぞかし。さればくらがりにてあかりを見るやうに、己が智をふかくひそめ養ひて、くらき

より明らかなるを生ずるやうにすれば、其の明悠長寛大にて、自然に遠きにおよびなん。それこそ眞の明といふべけれ。もし己が材智にほこり聰明を盡して、たゞ手もとのあかるきを専にせば、あかりにあてくらがりを見るがごとし。其の明、淺近短慮にて、遠きに及ばざるのみならず、たゞ手もとの事のみ見えて、下手の碁をうつがごとし。末の手は見えざる程に、毎々是非をあやまる事も多かるべし。こゝをもて、聖人易において、「明入地中、明夷、君子以莅衆、用晦而明。」と宣へり。古の聖王、冕旒目を蔽ひ、黈纁耳を塞ぐも、聰明の刃はやきをきらうて、晦きをもちひて養はんとなり。古より、倭漢ともに大智遠識の人の、己が材智に傲りて、好んで自ら用ふるを聞かず。老子の「良賈深藏若虛、君子盛徳若愚。」といへるも、げにさることぞかし。ちかきころ、故板倉周防守京都に留守たりし時、訴訟をきかれしに、己が材智のはやまり、聲色のうごきなば、我もそ

良賈云々
老子曰、吾聞之、良賈深藏若虛、君子盛徳容貌若愚(史記列傳)
板倉周防守重宗のこと。

れに氣乗じ、彼もそれに氣奪はれ、兩造の辭を審かにせず、雙方の情を盡さざる事あらんとて、必ず障子を隔て、わざと手づから茶をひきなどしたゞ心のちらぬやうにしてきかれしとなり。さすが近代の名人とはいひながら、おのづから聖人の心にもかなへり。それ故、曲直理を盡し、聽斷神に通じ、人々畏服せざるはなし。いはゆる晦を用ひて明なるにあらずや。今に至りて、世の談者傳へ誦して口實とする事、枚擧するにいとまあらず。中にも翁が最も感じおもふ事あり。周防守ある時、京の在家を通られしに、さる家に幼少の子出であそびしが、「あれ周防こそ通らるれ。」といひしを、周防守馬上にて聞きとがめて、「我不肖といへど、上の御代官としてここにあれば、京中村閭に住する者、男女老弱をいはず、我をかかくおしくだしていふ事あるべからず。しかるに此の家の兒輩かくいふは、常に家人の我をうらみてかくいふを聞馴れし故なるべし。是

は定めて子細あるべし。」とて、其の家主の名をきかせて通られしが、翌日其の家主を召しよせて、「汝先年何にても訴訟したる事やある。今尋ぬるは、少しもきづかひなる事にてはなし。ありしやうに申すべし。」といはれしかば、始め何かと辭退しけるが、再三とはれて、「此の上はかくさず申し上候。その年その月の事にて候。父の配分の事に就きて、一類の者と争ひ候うて訴へ候ひしが、其の者無實の事を申しかけ候へども、證人どもを多くこしらへ候うて申出で候故、御聽斷の上相手の勝に定まり候。其の次第かやうかやうとくはしく語るを、下役人に命じて其の手にあたりし簿案をくらせけるに、すこしもたがひなかりしかば、其の上にていよゝゝ尋ねきはめて、「是はたしかに某が聴きあやまりたるなり。いと残念なれども、もはや年久しき事なれば今更すべきやうなし。其の配分ほどを、某償つて我が過を謝すべし。」とて、自分の金銀を出して

其の者へとらせられしとぞ。是にてしるべし周防守己が威勢をつのらず、己が過失をかくさず、我は常に晦に處て明を銜はず、我は常に愚に處て智を先だてず、其の心公にして私なし、誠に古今に有りがたき明智といふべし。今是等をもて此の諺を考ふるに、燭臺は、ながくしてもとのくらきにて其の明おのづから遠きに及ぶ。君子の道は、闇然として日にあきらかなるがごとし。もし短うしてもとあかるければ、其の明わづかに近うしてやみぬ。小人の道は、的然として日にほろぶるがごとし。此の理をしめして、明かなるものは、必ずもとを暗うすといふ心にて、燈臺もとくらしといふにもあらんかし。但し此の諺の正意は、各のいへるごとくなるべし。翁がいへるをば、姑く一説にそなへ給へかし。さても根もなき事にあまりくはしき僉議かな。」とて、翁微笑しければ、諸客「かやうの事にも、翁の心のつけられやうこそ別段の事にて候へ。」とて

各感じあへり。(卷四)

七月は世々の形見

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、萩吹くか
ぜも身にしむころなり。久しく翁のがり行かねば、此のほどの老
のねざめも覺束なし。いざたづね訪はんとて、ある夕暮に例の人
人打ちつれて來しが、又もまゐらんとて歸らんとせしを、翁とゞめ
て、「今宵は月もよし、薄酒すゝめ奉らん。しひととまり給へ。」とい
へば、翁の心をいかでそむくべき。さあらば」とて、各座をしめて
清談の露やう／＼繁き程に、家人やがて心得て、取りあへぬまでに
あるじまうけし、さかな取りそへて盃出しける。諸客皆酔ひて興
に入るとぞ見えし。其の中に一人盃を停めて、「青天有月來幾時。
我今停盃一問之。」と、李白が詩を高らかに打吟じけるを、又ふたり

李白
支那唐代の大詩
人。名は白、字は
太白(皇紀一三
六二一—一四二
二)

大方は云々
前に琴後集の七
に註出した古今
集の歌。業平の
作である。

脇よりつけて、「人攀明月不可得。月行却與人相隨。」とうたふ。又
外の人々迭に唱和して其の次を、「皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝
發。」と謠ふ。又其の次を、「但見宵從海上來。寧知曉向雲間沒。白
兔搗藥秋復春。姮娥孤棲與誰鄰。」と謠ふ。其の次よりは翁も助
言して、「今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人若流水。共
看明月皆如此。惟願當歌對酒時。月光長照金樽裏。」とうたひを
さめけり。其の後數獻に及びて、玉山倒るゝばかりに見えけり。
さて翁いふやう、大かたは月をもめてじとはよみたれども、老の心
も月みるにぞなぐさみ侍る。されどそれにつきて、千載無窮の感
もおこりぬれば、うべ月を人の老となるともいふべかめり。但し
月を見るにいろ／＼あり。今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八
月十五夜の宴に、ひとり隅にむかひて居たりしに、さる武士の一丁
字知らぬが、月をつく／＼と見て、月は徑いく尺かあるべき。各考

へて見給へ。」といふ。また同じやうの人かたへより、あれは物の
 切口と見ゆ。奥へ長さいかほどかあらん。」とて、互に僉議しける
 を、きく人々、皆舌をくひけり。翁もをさな心にをかしかりき。今
 思へば、世俗月を賞して、光のあかきをほこり、影の清きにめてて、良
 夜とてたゞ打寄り物喰ひ酒のみなどして、歌ひのゝしるを樂とす
 るは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。又騷人墨客の月を詠
 めて、字ごとに金玉を雕り句ごとに錦繡を裁するも、風雅には聞ゆ
 れど、其もただ景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事をし
 らぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、我儕古人を慕ひて、其
 の書をよみ其の心をしりつゝ、常に世をへたる恨あるに、月ばかり
 こそ世々の人を照し來て、今にあれば、古人の形見ともいふべし。
 されば月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影もうつるや
 うに覺え、月はものいはねども、語るやうにもおぼえ、忘れてはむか

杜甫
 支那唐代の大詩人。名は甫、號は少陵、字は子美。(皇紀一三七二—一四三〇)
 楚辭
 楚の風原の文、今日楚辭といふ書には風原の弟子宋玉の文も集めてある。
 屈子
 風原のこと。楚の懷王に代へたが讒言によつて流された。

しの事をとほまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣をす
 て、一氣に古今を洞觀して、「青天有月來幾時。」といひ出づるより、
 氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべ
 き事がらにあらず。むかしより李杜とて、杜甫が上に稱するも理
 にてこそ侍れ。然れども李白が詩も、古今流水ごときを感ずるま
 でにて、後代を待つ心の心は見えず。翁むかし楚辭をよみて、「往者余
 弗及、來者吾不聞」といふに至りて、屈子が心をおしはかりつゝ、感
 にたへずなんおぼえき。この二句の意をいふに、屈子一代に知己
 なきを悲しみて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度あうて
 語らうてとおもへど、其の世に及ばねばかなはず。又末の世にさ
 る人こそありて、我と心と同じうすらめとおもへど、其の人をきか
 ねば誰とかしらんとぞ。是なん屈子に限らず、古今心あるきはは、
 大かた此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るに

や、いとゞ感ふかく覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、
 いづれの代にか又わがごとく月に對して今を忍ぶ人もやあらん。
 月はさこそ其の世をも照すらめ。もしあつらへ告げらるゝもの
 ならば、月にさは一言をも残さましとおもひ侍る。そのこゝろを、
 月見れば末の代までも忍ばれて
 見ぬいにしへのいとゞゆかしき
 こゝをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ
 いはれなきにはあらず。(卷五)

新國文
 撰近世名著抄
 終

大正十年九月三十日印刷
 大正十年十月三日發行
 大正十年十一月廿六日修正再版印刷
 大正十年十一月三十日修正再版發行
 大正十四年十二月十日修正四版印刷
 大正十四年十二月十四日修正四版發行

國文新撰近世名著抄
 附定價參拾六錢
 大正十五年度臨時定價金六十一錢

編者 松井簡治

發行兼印刷所 株式會社三省堂
 代表者 神保周藏

東京市麴町區大手町一丁目一番地
 東京府荏原郡蒲田町

著者權所有

發行所

(東京麴町)

株式會社 三省堂

電話牛込七二六三(振替口座東京三五五)

大正十四年十二月二十四日

文部省檢定濟

